

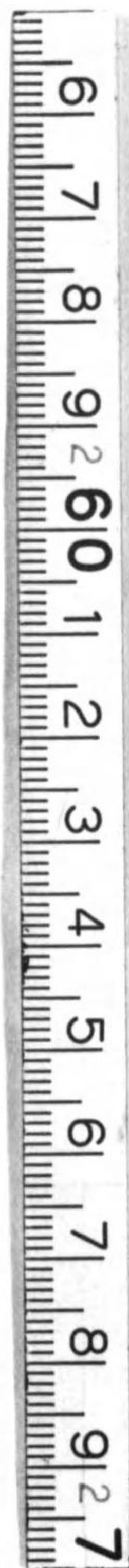
27-91イ



1200701636991

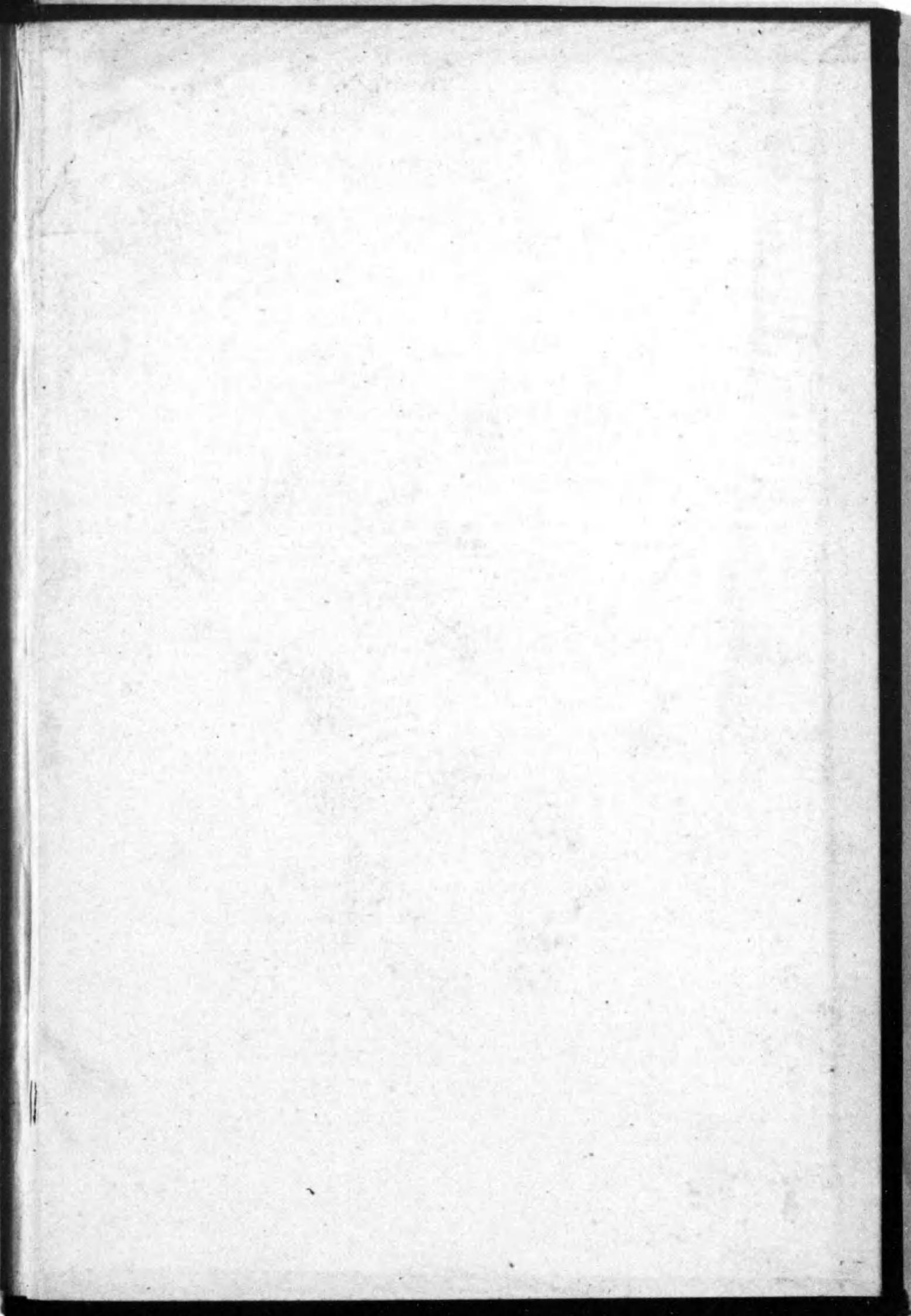
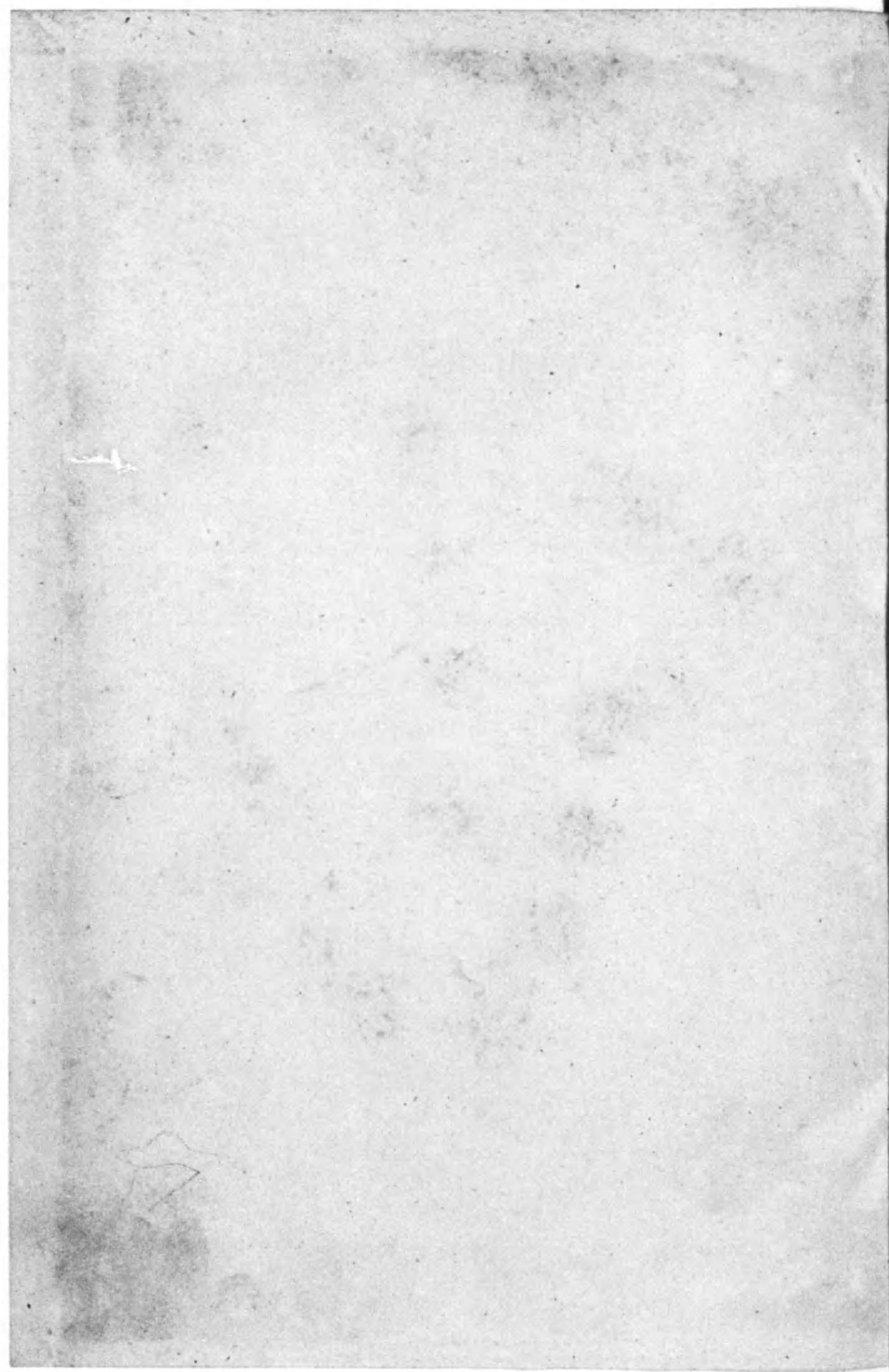
27

91イ



始





27
911
19.224/2/24



文學士 高津鋏三郎
文學士 和田萬吉
同纂



國文學

東京 文學社



中等教科 國文學卷四

目次

○兼好法師

四季の評

あだち野の露

花の盛に月の隈なきをのみ見るものか

○阿佛尼

十六夜日記 初節

同上 廿八日廿九日の條

○鴨 長明

長明の述懐

春のけしき

○藤原定家

短歌 十一首

○源 實朝

短歌 八首

○藤原俊成

短歌 十二首

○西行法師

短歌 十二首

○失名氏

五色の鹿の事

○赤染右衛門

浦々のわかれ

○紫式部

雨夜の品定の段

其二

○清少納言

にくきもの

○壬生忠岑

短歌 十一首

○凡河内躬恒

短歌 十二首

○紀 貫之

短歌 十二首

古今和歌集序

土佐日記

同

○僧正遍照

短歌 十首

○在原業平

短歌 十四首

○小野小町

短歌 十首

○失名氏

伊勢物語

○失名氏

大伴御行の大納言の事

○大伴家持

家持作歌一首並短歌

忽沈疴疾殆臨泉路仍作歌詞以申悲緒一首並短歌

賀陸奥國出金 詔書歌一首並短歌

悲世間無常歌一首並短歌

○山上憶良

令反感情歌

思子等歌一首

貧窮問答歌一首並短歌

老身重病經年辛苦及思兒等歌五首 長一
短四

○失名氏

藤原宮之役民作歌

天皇崩御時婦人作歌一首

羈旅歌一首並短歌

詠水江浦島子一首並短歌

○太安麻呂

八俣遠呂智の段

意祁命御論の段

○山部赤人

望不盡山作歌一首並短歌

山部宿禰赤人作歌二首並短歌

山部宿禰赤人作歌一首並短歌

○柿本人麻呂

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌二首並短歌
柿本朝臣人麻呂從石見國別妻上來時歌二首並短歌
高市皇子尊城上殯宮之時柿本人麻呂作歌一首並短歌

○失名氏

文武天皇御即位の詔(宣命)

○失名氏

藤原永手公吊ふ詔(宣命)

○失名氏

祈年祭祝詞

目次終

中等 國文學 卷四

文學士 高津 鉄三郎 同纂
文學士 和田 萬吉



兼好法師 吉田兼顯の子あり。後宇多上皇に仕へて北面武士とあり、稍親昵せられしが上皇崩じて後、遁世して兼好法師と名のり、和歌を詠じて自ら娛不とし、後村上天皇正平五年に歿せり、年六十八。

○四季の評

をりふらの遷り變ること、物ごとに哀なれ。物の哀れ秋こそまされど、人ごとはいふめれど、それもさる物にて、今一と際心も浮きたつ物は、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なごもことの外に春めきて、

長閑なる日影に、垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞わたりて、花もやうくけしきだつほどこそあれ。をりしも雨風うち續きて、心あわたしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、萬に唯心をのみぞなやます。花橘は名にこそおへれ。猶梅の匂にぞ、いにしへの事も立ちかへり、戀しう思ひ出でらるゝ。山吹のきよけに、藤のおほつかなきさましたる、すべて思ひすて難き事多し。灌佛の頃まつりの頃、若葉の梢すゝしけに、繁り行く程こそ、世の哀も、人の戀もさもまされど、人の仰せられしこそ、實にさる物なれ。五月菖蒲ふく頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなき、心やそからぬかは、六月の頃、あやしき家に、夕顔の白く見えて、蚊遣火ふをふるもあされなり。六月菘またをかゝ。七夕まつるこそかまめかゝけれ。やうく夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、早稻田、苧り乾きなど、取り集めた

ることは、秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかゝけれ。言ひつゞくれバ、皆源氏物語、枕草紙など、言ぶりにたれど、おなじ事、又今更にいはじとにもあらず。おほしきこと言はぬハ、腹脹るゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべき物なれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色あそ、秋にハをさゝくおとるまじけれ。汀の草に、紅葉の散り留りて、霜いと白う置きける朝遣り水より烟のたつこそをかゝけれ。年の暮れはて、人ごとにて急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれかる。すさまじき物にして、見る人もなき月の寒けく澄める廿日あまりの空こそ、心ほそき物あれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あされにやんごとなき、公事とも繁く、春のいそぎにとり重ねて、催し行むるゝさまぢいみじきや。追儼より、四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦日の夜、いたう暗きに、松さもとも

愛して、榮行く末を見んまでの命をあらまじ。ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。

あだしの野の露 鳥部山の烟云々 人間常住にして 死ぬとあくば いみじ

けれ 最も 宜し はかり どは こよなう 此上も 醜きすかた

老いぼれ たる姿 見憎か らず めやすかるべけれ

○花は盛よ月ハ隈なきをのみこるものゝハ

花ハ盛に、月は隈なきをのみ見るものかは、雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほ哀に情ふかし、咲きぬべき程の梢、散り萎れたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも、花見にまかれりけるに、早くちり過ぎにければとも、さはる事ありてまから

でなごも書けるハ、花を見てといへるに劣れることかは。花の散り月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことに、かたくあよる人ぞ、この枝かの枝ちりにけり、今は見所なごなどはいふめる。萬の事も、始終こそをかしけれ。中略望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちとぐれたるむら雲がくれの程、又なく哀なり、椎柴、白樫などのぬれたるやうなる、葉の上にかきらめきたること、身にしみて心あらん友もがな、と都こひしうおほゆれ、すべて月花をばさのみ目にて見る物かは、春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。よき人は、偏にすけるさまにも見えす、興するさまも等閑なり。片田舎の人こそ、色こくよろづのちもて興すれ。花のもど

には、ねぢより立ちより、傍見ワカシもせずまもりて、酒のみ連歌して、はて
の大なる枝、心なく折り取りぬ。

たれこめて 家に籠り居て かたくななる人 頑固なる人

阿佛尼

阿佛尼は、權大納言藤原爲家の妻にして、和歌を能くせり。初め、安嘉門院に
仕へて、四條と云ひき。爲家薨後、其庶子爲氏、阿佛の子爲相の所領を奪ひし
かば、阿佛自ら鎌倉に赴きて之を訴へしが、遂に病んで其地に歿せり。

○十六夜日記 初節

むろく、壁此中よをもとめ出たをけん書の名をば、今此世の人の子
の、夢ばかりも身のうへの事との知らざをけりな、水莖の岡の葛葉

かへすくも書死置く跡たしかなれども、かひなきものゝ親此い
さ免なき。又賢王の人をきて給ぬ政にも漏れ、忠臣の世を思ふ情
よもすてらるゝものゝ、數ならぬ身ひとつなりとぞと思ひ知りな
がら、まよせしめてもあらで、猶不忠のうれひこそ、やるかよなくかか
しと。更ふ思ひつゞくれバ、和歌の道は、唯實をくなく、あだなるす
さびをありと思ふ人もやあらん。日本此國に天の石戸ひらけし時、
四方の神たち此神樂の詞を始めて、世を治免物を和ぐる媒となり
よれるとぞ、この道の歌仙等、記し置かれたりける。さてもまた、集
を撰ぶ人はためしお不かれど、二たび勅をうけて、世々ふ聞えあけ
たるは、類をほありがとくやありけん。そのあとよも携はりて、三
人のをのこども、百千此歌の古反故どもを、いふある縁よかありけ
ん、預り持たることもあれど、道を助けよ子をばぐよめ、後の世を吊

へとて、深き契りをむすびおられ、細川のなづれも、故なくせきと
 められしや、跡吊ふ法の燈火も、道をまもり家を助けん親子の命
 も、もろとも消を争ふ年月を経て、危く心ほそきものから、何とし
 てつれなく今日まではなづらん。惜しからぬ身ひとつの、やそ
 く思ひすつれども、子を思ふ心は闇を、猶不忘のびびとく、道をかへ
 りみる恨はやらんあゝあゝ、さてもおは、あづまの龜の鑑よりつさ
 ば、曇らぬ影もや顯はるゝと、せめておもひあまて、萬れはゞかり
 を忘れ、身を益あきものよなして、ゆくりもなくいざよふ月に
 さそはれ出でなんとぞ思ひなりぬる。さりとして文屋康秀がさそふ
 にもあらず。住むべき國もとむるにもあらず。ころは眞冬立つはト
 めのさた免なき空なれを、ふりみふらずみ時雨も絶えず、嵐に競ふ
 木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事に觸れて心ほそく悲しけれ

と、人やりならぬ道なれば、往き憂しとてもとゞまるべきにもあら
 で、何となく急ぎ立ちぬ。めかれせざりつるほごだ、荒れまさりつ
 る庭も籬も、ましてと見まはされて、慕ひけなる人々の袖の雫も慰
 めかねたる中にも、侍従大夫なごの、あながちにうちくづしたるさ
 ま、いと心ぐるしければ、さまゝ言ひこしらへ、閨の中を見れば、昔
 の枕さへさながらかはらぬを見るにも、今更かなしくて傍に書き
 つく、

とゞめおく ふるき枕此 ちりをたよ
 わがたちさらさ たれおさらはん
 始めて 鎌倉幕府 せめて 心切
始めて あづまの龜の鑑 の裁判
 ゆくりもなく 不意 人やりならぬ道 自身の心から めか
見ぬ うちくづしたるさま 悲みかこ てるさま

○全上 廿八日廿九日の條

廿八日伊豆の國府を出で、箱根路にかゝる。いまた夜深かりければ、

たまくしけ 箱根の山を いそげども

なほ明けぬまよ よこ雲れそら

足柄山は道遠しとて箱根路にかゝるなりけり。

ゆるしさよ 彼方の雲を そなたてよ

あだまならぬる あらからの山

いとさかた山をくだる人此足もとゞまりがたし湯坂とぞいふなる。辛うじて越えはてたれば、又麓に早川といふ河ありまことにはやし木の多く流るゝをいかにと問へば海士の藻鹽木を浦へ出さんとして流すなりといふ。

あづまぢの 湯坂を越えて 見わたせむ

若ほ木ながるゝ 早川此みづ

湯坂より浦まで、日暮れかゝるゝとまるべき所遠し伊豆の大島まで見渡さるゝ海面を、何處とかいふと問へど、知りたる人もなし。海士此家のみぞある。

あまの住む その里此名も 若らなみの

よする渚よ やどやからまじ

鞠子川といふ河を、いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ所とゞまふ。明日も鎌倉へ入るべしといふなり。

廿九日酒匂を出で、濱路をはるゝと行く。明けはなるゝ海づらを、いとほそき月出でたり。

浦路ゆく こゝろがそさを 浪間より

いで、知らずる ありあけの月
渚によせかへる浪れうへに、霧たちて、數多ありつる釣船見えずな
りぬ。

あま小船 こそ行くかたを 見せととや

浪よたちそふ 浦れあさまり

都遠くへたよりはてぬるも、なほ夢れこゝちして、

立ち離れ 世もう死浪は かけもせじ

むかしの人れ おなじ世ならを

東にて住む所も、月影此谷とぞいふなる。浦ちか死山もとにて、風い
とあらじ。山寺の傍なれを、のどかにすてくて、浪れ音松の風絶えせ、
都の音信いつしかよおやつゝなきほせにしも、宇都の山にて、行き
逢ひたりし山伏のたよりに、ことづけまうたりし人の御許より、

たしかなる便につけて、ありし御返しとおほしめて、

たびごろも 涙をそへて うつれ山

若ぐれぬひまも さぞしぐるらん

ゆくりなく あくがれ出し いざよひの

月や後れぬ 形見なるべき

都を出でしことは、十月十六日なりしかば、いざよふ月をおほしめ
し忘れざりたるにやと、いとやさしくあわれみて、唯この返事にか
りをぞ又きこゆる。

めぐりあふ 末をぞたのむ ゆくりなく

空にうのれし いざよひの月

たまくしけ

箱根といと
ん爲の冠辭

藻鹽木

海藻を懸け干す木にて鹽は此海
藻にまばく潮をかけて後に取

鳴 長明

長明ハ菊大夫と稱せり。代々鳴社の氏人にして、父祖み亦其禰宜たり。長明、和歌に巧みなりしかば、後鳥羽上皇召して和歌所の寄人とせられたり。曾て父祖に襲ぎ社司とならんことを奏請して許されざりしかば、これより快々として樂まず終に僧とありて、大原山に入れり。時に年五十ありき。

○長明の述懐

我身父方の祖母の家を傳へて、久しく彼所ニ住む。その後縁かけ、身おとろへて、若のおかたしく、しげかりしかば、遂ニ跡とむることを得ずして、三十餘にして、更ニ我心と一の庵をむすぶ。これをありし住居ニ准ふるニ、十分が一なり。たゞ居屋をかりを構へて、はかしくしくは屋を作るに及さず。纔かニ築地をつけりといへども、門たつるニたつきあり。竹を柱として、草やとりとせり。雪ふり風吹くこと

一、危からずしもあらず。所ハ河原近ければ、水の難深く、白波の恐もさわびし。まべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませることハ、三十餘年なり。その間をりくゝのたがひめよ、おのづから短き運をさとりぬ。すなわち五十の春をむかへて、家を出で世をそむけり。もとより妻子をければ、捨てがたきよすがもなし。身ハ官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲よ、いくそはくの春秋をかへぬる。

こゝハ六十の露消えおたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いハ狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶のまゆを營むがごとし。これを中ごろのすみかよなすらふれば、また百分が一ニだに及さず。とかくいふ程に、齡ハ年々に傾ぶき、住家ハをりくゝよせばし。その家のありさま尋常も似ず、廣さは僅に方丈、高さは七

尺が内なり。所をおもひ定めざるがゆゑ、地を若めて造らば、土居を組み、うちおほひを葺きて、つぎめごと、かけがねをかけたなり。もし心になかぬことあらば、易く外へ移さんがためなり。その改め造る時、いくさくのわづらひかある。積むところわづかゝ二輛なり。車の力をむくゆる外へ、更に他の用途いらす。

いま日野山の奥に、跡をかくして後、南に假の目がくさし出て、竹の簀子を敷き、その西に闍伽棚を作り、中へ西の垣に添へて、阿彌陀の畫像を安置しまつりて、落日を請けて眉間のひかりと、かの帳のとびらに、普賢竝に不動の像をかけたなり。北の障子の上に、ちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置けり。そなはち和歌管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶、おのゝ一張をたつ。いはゆるをり箏、つぎ琵琶これなり。東にそへて、わらびのほと

ろを敷き、つらなみを敷きて夜の床とせ。東の垣へ窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方へ爐あり。これを柴折りくふる便とせ。庵の北へ少地をいぬ、あはらなる姫垣を圍ひて園とす。そなはちもろもろの薬艸をうるゑたり。假の庵のありさまかくのごとし。

その處のさまをいはず、南に寛あり。岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷へけしれど、西へ晴れたり。觀念のたよりなきに、もあらば、春は藤波を見る。紫雲の如く、よして西のかたへ匂ふ。夏は時鳥をきく。かたらふごと、死出の山路をちぎる。秋はひぐらゝの聲耳に充てり。うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。つゆりきゆるさま、罪障に譬へつべし。もゝ念佛ものうく、讀經まめならざる時、みづゝら休み、みづゝら怠るゝ妨ぐる人もなく、また耻

づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業を
 さめつべし。必き禁戒をまもるとし、もかけれども、境界なけれは、何
 もつけての破らん、もし跡の白波に身をよる朝は、岡の屋に行
 きかふ船をながめて、満沙彌が風情をぬすみ、もし柱の風、葉をなら
 せ夕は、潯陽の江をおもひやりて、源都督のなづれをならふ。もし
 あまりの興あれば、若はく松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の
 音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめ
 んともあらざ。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづゝら心を養ふはか
 りなり。(方丈記)

よすが 所 執 執 用途 費 ほころ 丈 伸 ひ は、 つ か
 なみ 藪 し ろ

○春のけしき

春風も稍深う吹き渡りて青柳の枝に宿かる百千鳥のこゝを、瀬に
 うち囀り、園生は遊ぶ胡蝶の、垣根の露を命とや、夢はありの浮世の
 そさび、昔の夢も、かうやうの身に、うらやましくて、いとゆふにさ
 へつなびるべき。老かゝるほそき脚も、芝生の弱竹を杖に切りて、こ
 こらの野をあさるに、桃のうち笑ふはあり、艶に咲き誇りて、道の傍
 は春の草生ひ茂れり。春いくばくか暮れかんと、つゝじりうたふて、
 谷に下りて、携へし物を搔き鳴せば、流るゝ水を調べたちて、及ばぬ
 ひゞきに、みづゝらも片腹いたう、つくゝと、昔ありける貞敏公の
 面影も通ふはあり、涙も水もなどいひきてぬ。今日なん曲水の御宴
 今はあり始まるべきこそ。元來土器もたらぬ谷のどさく、まいて

このもゝをぬ身なれば、巴の文字も書き流すべきまあらざ。司召の除目この日さろまやと、百敷の御わざも、久しういひ入れたまぬ身は、思ひもよらで、暫しありては猶ぞ思ひ出づる所もあれば、それかかれかと、その司々心當りたるく、現のやうに覺えたり。御燈なごいふことは、方神相應のかたへ燈明手向けたる事にて、この事懿徳天皇より起りて、これなん三日の夜もあるべき。十日あまり五日のころは、八幡の御齋會、笹竹の大宮人、藏司添ひて参りぬべし。紫野の根の國の神の社に花を奉る。その日は、少納言並に主鈴など参りて、疫の神に封を奉り、看督の長靱を懸けなんなど、神司をこらしものさ、やをらまはてよくと、若はく歌ひて、花を手折りて、宮の男だちに傳ふ事なり。この事後一條院のころはひより始められしとなん、やをらまはてよとは、春の氣に、上一人より下末々まであ

たらせ給はせ、下にもわづらはで、安らかにはてよとの事なるべし。官人かへれば、百敷の内を行きかふ人、御格子の内よりその花たうべん、物等かはりま奉らんかと、いとさき官人の袖に取ひつき、奪ひ取りぬ。よくしともいそで、やらひ遣りぬる事も、さきが石木からぬ人の心、哀まやさしきや、かゝる山里のゆさせたる獸は、さはあるまじ、東の人の心は、大方獸のやうに覺えたり。さはいへど、かへりてい悲しき志を盡し、命も身も代へて、人をも救ひ、數多眷屬ひき隨へて、仇をも扶けためりしことなご人も言ひ傳へ、近う目に見そなはしぬれば、都とても田舎はづかじうこそ。たゞ花紅葉まつけ、月雪の庭またゞきみて心敏く折し合ひたる言種、いひも若ろひ、よみいたそことなん、都の人はまさりぬる。ともかうも語らふべきは、田舎人なるべし。中略小野の小町の世に、さそらひて、誘ふ水あり

て、他の國まで空しくなりしかば、女などは別きて、九重のうちまで、
 ともかうも尼もなりて、世を過るこそ本意ならぬ。男といふもの
 は、君よつかへ、朝な夕な思ふ妻子をはぐみ、飢を救ひ、夜寒の風を
 凌ぐものなどは、九重の住居あるの遠き國をも治めんは、さもあら
 ばあれ、世をそかなみ頭おろして、草の袂苔の席のうきふらひ、いか
 まぞや、都の内のかくらうがはしきに、まいて知れる友などの行
 き通ひ、昔ありけん事言はん、口惜しかりぬべし。唯安らかに稻葉
 の露を慕ひて、一鉢のをかきき落葉を拾うて、御燈明のたつきとも
 せまほしうこそ、我も忘か思へど、又捨てやらぬはたしあは、このひ
 とつの樂器なるべし。佛は狂言綺語とか、かゝる器の音あは、なほさ
 ら心も清くあるべきを、翁がはかなき心よならせことはいひ知ら
 ぬ涙、そゞろにうかびて、煩惱の種をも蒔かなくとかや、忘かし打ち

遣らんも情なし。あるもうければと、ひとりおちたる寐さめよは、知
 らぬ太山の狐狸泉やうのもの、ら、これをどうでよあれば、さそがよ
 なぞいひきて、草よのみになりて、忘れては又搔き鳴らをも、藤の波
 をたへよて、この日野山の峯に咲き匂へる、北の藤波千代かけて、こ
 ゝを補陀落の峯よもと思ふたんめるに、山郭公の寐てる覺めてか
 と思ふをかり、山響に答へくくして、二聲のやうに音づれたり。かゝる
 太山かくれよも、かへさをそゝむるやと、をかゝう思ふに、やよひも
 暮れて、今日をなん三月盡の日とか。(四季物語)

つゝじりうたふ 口ずさひに謠ふ 司召の除目 官人に司職を賜ふ式 根の國

泉 黄 百敷 都 らうがそし 騒がし

藤原定家

定家は俊成の子なり。治承壽永の間に正五位下に叙せられ、それよりさま
さまの官を経て、正二位に進みたり。曾て後鳥羽上皇の勅を奉じて、新古今
和歌集を撰び、また後堀河帝の勅を奉じて、新勅撰和歌集を撰びたり。仁治
二年に薨じぬ。年八十。

○梅花夜薫

おろそらひ 梅のおろひよ かきみつゝ
曇りもそてぬ 春の夜の月

○羈中晩風

いづくあか 今宵そ宿を かり衣
ひも夕くれの 峯のあらゝあ

○百首歌奉りし時

駒とめて 袖うちをらふ かけもな

さのゝわたりの 雪の夕くれ

○春たつこゝろを

音羽川 雪けの浪も 岩こゑて
關のおなたあ 春へ來あけり

○題知らず

郭公 若バシやをらへ すがそらや
伏見の里の 村雨のそら

○曉霞

初瀬山 ちたぶく月も ほのくくと
霞あもるゝ 鐘の音かあ

○花

いづくみても 風をも世をも うらみまゝ

吉野の奥も 花もちりけり

○寄鏡戀

ゆく水の 花の鏡の 影もうゝ

あたかる色の うつりやそさめ

○秋朝

小倉山 ちぐるゝあろの 朝なく

きのふいうそき 四方の紅葉

○題しらぬ

見こたせば 花も紅葉も なかりけり

浦のとまやの 秋の夕暮

○題しらぬ

雲路ゆく 雁の羽のせも 匂ふらん
梅さく山の 有明の空

(定家卿家集)

源 實朝

實朝は、頼朝の次子なり。世に鎌倉の右大臣と稱せらる。最も和歌に巧にして、衣笠内大臣等と其名を齊しくせり。建仁三年九月、頼家廢せられしかば、從五位下に叙し、征夷大將軍に任せられ、其後累進して右大臣とありしが、承久元年正月、公曉の爲めに殺されたり。年二十八。

○梅の花をよめる

春風の 吹けよ吹かねど 梅の花

咲けるあたりハ 若るくぞ有りける

○故郷春月といふ事をよめる

故郷ハ 見しよともあらず 荒れおけり

影ぞむろくの 春の夜の月

○山家見花といふ事を人々あまたつかうま

つりー次よ

さくら花 咲きく見れば 山里お

これぞ多くの 春ハへよける

○八月十五夜

久方の 月のひりりー 清ければ

秋のあさを 空お知るかな

○長月の夜きりくすの鳴くを聞てよめる

きりくす 夜半の衣の うすき上お

いたくの霜の おかすも有らなん

○太上天皇御書下預時歌

山の裂け 海ハあせなん 世なりとも

君よふたおよろ これ有らめやも

○落花をよめる

みちすびら 散りかふ花を 雪と見て

やすらふ程に 此日くらいつ

○霞

ものゝふの 矢なみつくらふ おての上よ

霞たばしる なすの篠原

(鎌倉右大臣家集)

藤原俊成

俊成は、俊忠の子あり。幼より聰慧にして、歌を藤原の基俊に學びたり。後鳥羽帝に仕へて、皇太后宮大夫となり、正三位に至れり。世に五條の三位と稱す。嘗て後白河帝の勅を奉じて、千載和歌集を撰べり。元久元年薨じぬ。年九十一。

○題知らず

駒とめて かな水かはん 山吹の

花の露そふ 井手の玉川

○時鳥

むかゝおもふ 草のいほりの 夜の雨あ

涙なそへそ 山布とゝ死ま

○千載集撰びける時古き人々の歌を見て

行末も われをも忍ぶ 人やあらん

昔をおもふ 心ならひよ

○述懐百首ふ鹿

世の中よ 道こそなけれ 思ひいる

山の奥にも 忘かそなくある

○山家月

住みわびて 身をかくなべき 山里に

あたりくまなき 夜半の月哉

○身をうらむる百首の中ふ蟲

さりともと おもふ心も 蟲の音も

よこぞとてぬる 秋の夕くれ

○古寺残月

またたぐひ あらゝの山の ふもと寺
そぎのいそりに あり明の月

○秋の歌

天の原 おもへばかざる 色もな

秋こそ月の 光りなりけれ

○月

あゝかたぢ みかおもかけぬ うかび來ぬ

行そゑてらせ 秋のよの月

○秋のうた

夕されば 野への秋風 身よそみて

うづらなくあり 深草の里

○題ふらむ

名お高き よしれゝ山の 花よりや
雲に櫻を まかへそめけん

○花

みよゝのゝ 花のさかりを けふとれば

越の白雪 春風ぞふく

(俊成卿家集)

西行法師

西行、姓ハ佐藤、名ハ義清、剃髮して西行と號せり。左衛門尉康清の子ありき。
鳥羽上皇に仕へて北面の武士とあり、左兵衛尉に任せられたり。和歌を嗜
みて巧みありしかば、大に上皇の愛するところとありしが、偶感するところ

ろありて、妻子を棄て、世を遁れたり。時に年二十三なりき、其後五十年間、天下を周遊して、専ら和歌を詠じ、建久元年二月、京都に歿せり。

○花

吉野山　こづの志をりの　道かへて

またとぬかたの　花を尋ねん

○題志らむ

心あき　身おもあられい　志られけり

鳴たつ澤の　秋の夕暮

○題知らむ

津の國の　なみその春の　夢おれや

葦の枯葉の　風渡るなり

○観心を讀みはべりける

やみされて　こゝろの空の　すむ月の
西の山へや　ちかくなるらん

○題志らむ

風吹けば　花の志らかみ　岩こえて
渡りわづらふ　山川の水

○題志らむ

都へて　月をあそれと　おもひくち
数おもあらぬ　そさびなりけり

○いせよまかりける時

すゞか山　うきよをよそふ　ふりそてよ
いかおなりゆく　この身なるらん

○天王寺よまわりけるよ、俄かふ雨ふりけれ

ば、江口ふ宿をかりけるふがさゞりけれど、

世の中を いとふまでこそ かたゝらめ

假のやとりを 惜しむ君かか

○戀のうた

今ぞある おもひ出よと 契りしハ

こそれんとての なさけなりけり

○題志らむ

あそれいかみ 草葉の露の こゆるらん

秋風たちぬ とやぎのゝ原

○題志らむ

とちの登み 清水かゝるゝ 柳かけ

志さしとてこそ 立とまりつれ

○花

おしあべて 花のさかまみ かりおけり

山の端ことみ かゝる志ら雲

(山家集)

失名氏

○五色の鹿此事

あれもむかし、天づくよ身比色を五色よて、角のいろは志ろき鹿一
つあまけり。深山よれをみて、人よ志られむ。その山のはとをよ大
なる川あま。それ山よまた鳥あり。此かせきを友として過せ。ある時、
あ、の川に男一人あがれて、志でに志なんとす。これを人たをけよと

さけおに、おのかせき、このさけお聲をきよて、かなしみよたへせいで、河をおよぎよて、おの男をたせけてけり、男命はいきぬるおとをよろこびて、手をきりて、鹿もむかひていそく、何事をもちてかおの恩をむくい奉るべきといふ。かせきのいそく、かよ事をもちてか恩をむくはん。たゞこの山よ我ありといふおとを、ゆめく人よかたるべからず、我身の色五色なり。人若りなむ、かをとらんとて、かならせおろされなん。この事をおそるよよて、かよる深山よかくれて、あへて人よ若られせ、若かるを汝がさけお聲をかなくして、身の行衛をよせられてたせけつるなりといふ。ときに男おれ誠理をなり。さらにもらほおとあるまよと、色々契りてさりぬ。もとのさよと歸りて、月日をおくれさも、更よ人よかよらず。かよるほよに、國の後夢に見給うやう、大なるかせきあり。身の色は五よきよて角若

ろし。夢さめて大王よ申し給そく、かよるゆめをなんよつる。おのかせき、さためて世よあるらん。大王かならずたづねとて、これにあたへ給へと申し給ふよ。大王せんよを下して、もよ五色のかせきたづねて奉らんものよは、金銀珠玉等のたよら、ならびよ一國等をたおべしとおほせけれらるよ、此たせけられたる男、内裏よまゐるをて申すやう、たづねらるよ、いろのかせき、その國は深山よさふらふ。あよ所を忘れり。狩人を給りてとりてまゐらほべしと申すよ。大よよろおび給ひて、まづからおほくの狩人を具して、おのをとをを忘るべよめしと若て行幸かりぬ。そは深山よいり給ふ。このかせきあへて若らせ。若らのうちよふせり。かの友と若るからせこれをみて、大よおどろきてこゑをあけてなき、耳をくひてひくよ、若かおどろきぬ。からせつけていそく、國の大王おほくは狩人をくよて、お

の山をとどまきて、是でにころさんと給ふ。いままよぐべきかきかむ。いかゞ是べきといひてかくくさりぬ。のせきおどろきて、大王の御こゝのもとへあゆみよる。狩人とも矢をとけて射んとす。大王の給やう、かせきおそる、事かく若てきたれり。さだめてやうあるらん。射るなかれ。そのとき、狩人とも矢をとづいて見る。御こゝのまへよひさまづきて申さく、我毛の色をおそるよによりて、この山よふかくかくれをめ。若かるよ、大王いかにして、おが住所をさるり給へるぞやと申すに、大王の給ふ、この輿のそまある、顔よあざ此あるをどこはけ申したるよよりて來れるなり。かせき見るよ、かほよあざありて、御輿の傍にゐたり。おがたをけたりよ男なり。のせきかれよ向ひていふやう、命をたをけたりよとき、この恩をよにても報つつくよがたきよといひいかさ、およに我あるよ、人よ

かたるべからざるよ、色々ちぎりよところなり。若かるよ、今を此恩をよせられて、おろさせ奉らんとす。いかよ、かんぢ水よおほれて死なんどせよとき、おのちをかへりよせ、およきよりてたをけよとき、なんぢかぎりなくよろこびよことのおほえやと、ふかくうらみたる氣色よて、涙をたれてなく。そのときに、大王おなじくなまをなびしてのたまそく、かんぢの畜生かれども、おひをもて人をとる。かの男の欲にふけて恩をよせられたり。畜生といふべし。恩をよるをもて人倫とすとて、このをとあをとらへて、鹿のゑる前よてくびをきらせらる。又の給そく、今よりのち、國の中よかせきを狩ることなかれ。もし此せんじをそむきて、鹿の頭よてもころそものあらば、そみやかに死罪よおこさるべしとてかへり終りぬ。そは、ちより、天下安全よ國土ゆたかなりけりとぞ、(宇治拾遺物語)

かせき 鹿の 手をすりて もみ手をして くひてひく 喘付き
 一名 頼む様あり
 動かす

赤染右衛門

赤染右衛門は、檢非違使赤染時用の女にして、大江匡衡の妻なりき。初め關白藤原道長の夫人倫子に事へ、才藻を以て當時の關秀の冠首たり。

○浦々のわかれ

かくて、祭をてぬれを、世中よいひさよめ死つるおとゞもあふべきさまよ、人々いひさためて、おそろしうむつる。内大臣殿も中納言殿も、おぼしおけく。殿よの御門をせして、御物忌忘きりなり。宮は御前も、ぬゞもおとしませ経を、大の御心ちさへなやましくくる

しうおやさるれば、ふしがちよてせぐさせ給ふ。よる事のお乃づのらもり聞ゆれば、あかあさまし、さやうの夢をも見せ、これいのおせむ。いのでたゞれふあす身をうしなふわざもあど、おぼしなけけぞ、いよしのせさせ給せん。此殿をら。せてもいなるべきおのあらん。さりして、ぬゞいま身をなけ、出家入道せんも、いとほことおれどろくしおらん事を乃びるべきおも何らせ、佛神ぞ、ともりくもせさせ給ふべきとて、せ、茂をなたせ、はゆものもきこしめさで、おけきあらしおもひくらし給ふ。内おの、陳お左衛門尉惟時、肥前々司頼光、周防前司頼親などいふ人々、みなおれ満仲貞盛の子むまこなり。おのくつものせも、かぎおらせおろくさふらふ。東宮は帶刀や瀧口やあといふものせも、よるひるさふらひ、關をうらえおどして、いとうとてあり。世おそれおあかぐるといひはくるも、いとゆ

乙。年比天變なごして、兵亂なごうかひはるの、此事おこそありな
 れど、よろづ殿は宮は、せるべきよういせさせ給ふ。物乃のせお
 もあらぬ里人さへ、よろづお、ともせせ、山おいふんとまうけをし、ゆ
 へし比の有さはかぞ。北方比御せうと明順道順の辨おといふ人
 々、あなこゝろ。さば、のうにこそ世のあめれ。いゝせさせ給せん
 せむるなどいひさじけと、はゆひあるべき事おも何かぬお、殿はう
 ちお曹司して年比さふかひはる人々、とありとも、りとも、君の
 なくならせ給せんまゝ、おこそそのと思せ、よろづをこほちひひ、
 乙ほめ比れゝおりもて出で、おらひさじくを見るお、いみじう心ほ
 そじ、されどさかどせいじ給ふべきおもあかき。よろづ比人の見お
 もふらん事を、まつらういみじうおせむるゝほせお、世の中おあ
 る檢非違使はれり、此殿は四方おうちかこみたり。たちこみたる

けしき、みち大路は四五丁をかり乃不せ、ゆきゝもせせ、いとけお
 そろし比殿のうち比けしき有さませも、いそんかたかくさわがし
 けれど、若ん殿のうちにおはらまらある人々おほかれど、人おそす
 るけしひもせせ、何それにかおし比に、かゝるあやし比ものせも、殿
 のうちにくちめぐりつゝ、こゝかじこを見さじけひひ、えもいと
 すゆゝしけあるに、物比ささはより見出して、あるの飛り比人々胸
 ふたがり、心ちいと、い。殿、いまは比がた比事にこそ、いあめ
 れ、いかで此宮を出て、木幡にまゐりて、近うもと不うもつかひさむ
 かたにはかりわざせんと、おせし乃給のるに、此ものともたちこ
 きたれを、おほろけの鳥けたものならせ、出たまらん事おたし。夜
 中おりとも、お死御かけにも、いま一度まゐりてこそ、い。いまは比わ
 りれおも御覽せられめといひつゝ、けの給をるまゝお、えもいと

せお不きお、水晶の玉をのりの泪はゞきこがるゝ、見奉る人、いゝ
 のやをのらん。母北方宮は御前御をぢ人々、例は涙おも何んぬ泪
 出きて、此おそろしけなるものごもの、宮はうちお入亂れたれを、け
 びいごもいもどろせいをれど、それよもさひるべきけしきなき
 ず。ゆるすとに、かくみたりおしきものゝ中ごもをのたわけ、さ
 るかたおうるのしく、さうぞきたるもの、南おもておたゞまありお
 参る。このなおしおかとおもふ不ごに、宣命といふものよむなりけ
 り。きけを、太上天皇をころし奉らんとおたる罪ひとつ、御門の御母
 后を比ろせ奉るつとひとつ、お不やけより外は人いまたお
 こかいざる太元の法をわさくしおかくしおこなはせたるつと
 より、内大臣をつくりの帥おなして、なごいつかをも、又、中納言をさ、
 出雲權守おなしてながしはりおはといふ事をよこのゝおるに、宮

のうちの上下聲をよと、なださる不ごの有さま、此もんよむ人も
 何とておたを、けびいごもよ、なごごをのこひ、何それみかならう
 ゆゝしうおもふ。そ乃わごちかき人々、みお聞きて門をさしたれ
 ご、此御聲おひられて、なごたを、絶ごごし。さて、いまは出させ給へ、
 日くれぬくゝとせめのゝお申せご、すべてとかくいらへる人
 なきよしを奏せさせれば、なごて、さるべき事おあらず、たゞせめ
 よとのみおさりに宣旨くたるお、かくて、それ日もくれぬれを、内大
 臣殿、故殿こよひご登ひてゐて出させ給へと、お不し念せさせ給ふ。
 御おるしにや、そこらの人、さをりいひ此ゝおりつれご、夜中をか
 りに、いみじうお入りたれば、御をぢの明順をりごと、御供に二三人
 して、ぬをまれ出させ給ふ。御心の中お大願をたてさせ給ふ。そのお
 るしおや、ことなく出させ給ひぬ、それより、このたお参り給へるお、

月あかければ、此所にいみじうこぐらければ、その卒どぞかしお
 卒しそありたそしまるりつるに、かの山ぢりあてい下させ給ひて、
 くれぐれとわけいせ給ふあ、木の間よりもり出でたる月を忘る
 べよて、卒都婆くきぬきいとおそるの中に、これと、去年は此ごろは
 事ぞありせれど、そこし忘ろうみゆれど、それ折のく人々あまた物
 と給ひしるべ、いづれよとよろづたづね参りよせ給へり。そこ
 にて、よろづをいひはげ、ふしまろびなせ給ふけとひよ、おどろ
 きて、山中の鳥けどものも、聲をあせせて鳴きは、忘る物のあそ
 れを忘る、あそれよなういみじきに、おそしましをり、人より
 けよめでたきありさはにとおぞお死てさせ給ひしと、ミづの
 ち此身の卒ゆゝしく侍りなれば、いまいかくて都をかれて、若ら
 ぬ世界よまのりあがされて、又のやうにあき御のけよも御覽せよ

るよやうも侍らど、みづのちおこたるとおもう給ふる事とべよ終
 と、さるべき身はつとよて、かう有るまよきめを見侍れと、いので、い
 だちもはのらで、こよひのうちをうしなふわざを忘てしあ
 と、なき御のけよも御おもておせと、後代の名を流し侍る、いとかな
 しき事なり。たをけさせ給へ。中納言もおなトくなびはかせせと、
 おなトりたにぞに侍らと、かよよよまよりわあるよ、かなしき事、
 又ゆゝしき身をさ、さるものよて、宮の御前、日比たよよもおそしは
 さぬが、かゝるいとよき事により、はゆ御湯をだあきあはめさせ、泪
 あ若たておそしまはを、いみじうゆゝしうたよけあく侍り。お
 そしまを陣の前、笠をだあぬぎてこそわたり侍れ。かくえもいと
 ぬものごもの、おそしまをめぐりにたちこみて、みさをひきかな
 ぐりあせして、あさましうたよけあくておそしまをとも、もした

まゝまたひらりあおとしませば、御産のをりいかおせさせ給えん
せらん。うひあき身だお、ゆくへもあせまくりぬれた、おなり此御
身をおれさせ給え、たひらりにとまもり奉らせ給ひて、又おけま
くも、おしこきお不やけ此御心ちよも、又女院此御夢なごよも、此事
とびなかるべきさまよ、おもせ奉らせ給へなど、なくく申させ
給ふまゝに、なみどにお不れ給ふ。さく人さへなき所なれた、明順こ
ゑもおしませな記たり。(榮花物語)

はゆ 少し お不あなぐり 大穿 うらなひ 先々より天變兵亂な
なり ともせば やゝとも お不めき がたくと せありて凶徴を示せ
し 然するあかれと お不ろけ 明らかに人目 さうぞき 装 くれ
し 制止するあり 心暗みてとい くきぬき 未 おもておせ 無面 東 くれ
ぐれと 心暗みてとい くきぬき 未 おもておせ 無面 東 くれ
方 諸 九々もおのしませぬ 御懐胎の 事といふ お不やけ 主上を
さす

紫式部

式部は、藤原爲時の子なり。幼よして穎悟、稍長じて博く和漢の書を讀み朝
廷の典故も通じ、且つ最も歌文を巧みおせり。早く其夫に後れて寡居し
たりしが、此間に源氏物語を書きたりといふ。上東門院に仕へて、一時の名
媛と詞花を闘ひし。また大に寵遇せられしといふ。

○雨夜の品定の段

其一

さて、世にありと人よ若られせ、さびしくあはれたらんむぐらの門
よ、思ひの外よりうたけあらん人の、どぢられたらんこそ、かぎりあ
くめづらしくいおほえめ。いかでまたかゝりけんと思ふより違へ
るをなん、怪しく心とまるわざあるべき。父の年おいものむつろと

けよふとりそぎ、せうどのかはよくけに、おもひやり異なるよなき
 ねやのうちよ、いといたく思ひあがり、そのかくしいでたるよわき
 も、ゆるなるらきみはたらん片のよよても、いゝ思ひのほのよを
 かしからざらん。すぐれてきなき方のゆらびよこそおよそざら
 め。さるゝたよて、すてびたき物をほとと、式部を見やれば、我いもう
 とよもの、よろしき聞はあるをおもひて、の玉ふよやとや心うらん
 ものゆいそせ、いでや、かみの若などおもふにぞに、おたけなる世を
 と君をおほそべし。若ろき御ぎともなよやのなるに、なほしはあ
 りを、若ぞけなくきなと玉ひて、ひもなともうちそてよ、そひふした
 まへる御ほかけ、いとゞめでたく、女にてみたてまつらまほし。この
 御ために、上がのみを、ゆり出ても、猶不あくまよくみは玉ふ。さま
 さまの人のうへよもを、かたりあそせつよ、おほかたの世につけて

みるには、とがなきも、我ものとうちたのむべきをゆらばむに、お不
 ろる中にも、ゆなん思ひきたむまよかりける。をのこのおほやけに
 つかうまつり、とかく若き世のかためなるべたも、まよのうつそ
 ものとなるべきを、とりいたさんにかたかるべし。されど、か
 しこしとて、ひひとりふたり、世の中をまつりおちるべきならね
 ば、上は下に助けられ、下は上になびきて、ことひろきあゆづろふら
 む。せさき家の内のあるよとよべき人、ひとり思ひめぐらすに、たら
 せであしかるべき大事よもなん、よさくおほかるとあれば、かよ
 るあふさきるさあて、なめにしてもありぬべき人のそくなきを、
 すきよしき心のそさびにて、人の有様をあまた見合せんのこの
 みならねど、ひとへに思ひきたむべきよるとするはかりに、おな
 づくは、我ちからいりをしあをし、ひきつくろふべきところなく、心

あかあふやうもやと、えりそめつる人の、さたまりがたはなるべし。
かならざしも、わがおもふにかあひねど、見そめつる契をかりを、す
ておたく思ひとまゐる人は、物まめやかかりとみえ、さてたもたる、
女のためも、こゝろおくゝおしとからるゝ也、されど、おにか世のあ
りさまをみたまへあつむるまゝに、心におよそす、いとゆかしくお
ともなしや、君たちのかみなき御はらびおは、まゝしていかほりの
人かそたぐひ玉をむ。(源氏物語)

らうたけ

美しく上
品ある様

せうと

兄

かやと

袍に似て裾の
つきよるもの

あ

ふささるさ

かれました
いふお同じ

かのめ

大かたに
ある事

○同

其二

所せく思う玉へぬだよ、形きたかけかく、若やかあるほどの、おの
トゝハ、塵もつかトと身をもておし、文をかけたおほさかよとゆり
をし、すみつきほのかよ、心もどかくおもせつゝ、またさやかあも
みてしおあど、すべかくまたせ、わづかあるこゑきくばかりいひよ
れど、いきのしたおひきいれ、言ずくおなるが、いとよくもてかくす
なりけり、なよびかあ女とみれど、あまりなさけおひきこめられ
てとりなせば、あためく、是を、はじめのなんとすべし。とが中あ、おの
めあるまよきひとの、うしろみのかたも、ものゝあそれ知りすぐし、
はかなきついでのおさけあり、ををしきおすゝめるかたなくて、
よかるべしとみおたるお、またまめくゝしきすぢをたてゝ、みよと
さみがちあ、びさうなきいへとうじの、ひとへあうちとけたる後見
ばかりをして、朝夕の出しりよつけても、おはやけわたくら人の

たすまひ、よきあしきとの、目おも耳おもとまるありさまを、うと
 き人あわざとうちまねをむやひ。ちかくて見む人のきゝわきおも
 ひとるべからむに、かたりもあせせやとうちも忍まれ、あみだも
 さしぐみ、もしひ、あやなきおほやけはらだ、しく、心ひとつにおも
 ひあまるをなどおほかるを、なに、かときかせむと思へさ、うちそ
 むかれて、人忘れぬ思ひいでわらひもせられ、哀ともうちひとりお
 ちたるに、なにぞぞなど、何はつかにさしあふぎるたらん、いか
 ぢの口をしからぬ。たゞひたふるに、こめきて、やはらかならむ人を、
 とかくひきつくろひて、なごかみざらん。こゝろもどなくとも、あ
 ほし所あるこゝちをべし。けあさしむひてみん程の、さても、らう
 たきかたお罪ゆるし見るべきを、たちをなれて、さるべきを、
 いひやり、をりふしおしいでんわざのあたととも、まめ王にも、我

心とおもひうるをなく、ふかきいたりあからんを、いとくちをしく
 たのもしけあきとかや、あほくるしおらん。つねに、をこしそはく
 しく心づきあき人の、をりふしおつけて、いせおゆるやうもあり
 ろしあご、くまなきものいひもさだめかねて、いたくうちあけく。今
 いたゞ品にもよらど。かたちをば、さらにもいとど。いとくちをしく、
 ねぢけおましきおほえたおなくば、たゞひとへにものまめやかあ、
 志づかなる心のおもむきならんよるべをぞ、つひのたのみ所に、
 思ひおくべかりける。あまりのゆるよし、心をへうちそへたらんを
 ば、よろこびおおもひ、すこしおくれたるかたあらんをも、あながち
 お求め加へじ。うしろやすく、のとけき所だに、つよくば、うそべのあ
 さけい、おのづからめてつけべきを、えんお物もちして、う
 らみいふべきを、見知らぬ様に忍びて、うへそつれかく操つく

り、心ひとつに思ひあまるときいそんかたなくすでき言の葉あ
それなる歌をよみおき、若のほるべきかたみをとめて、ふかき山
里、世はなれたる海つらさを、そひかくれぬかし、さらそに侍りし
時、女房などの物ぶたりよみを聞きて、いと哀れ悲しく心深きと
かなど、涙をさへなんおとし侍りし。今思ふに、いとかるくしく、
殊更びたる事なり、心ざらふらん男をおきて、みる目の前につ
らきとありとも、人のこゝろをみくらぬやうに、おけかくれて人を
まよひし、心をもみんとする程に、ながき世のものおもひあはる、い
とあぢきあきとなり。心ふかしやさをほめたてられて、あそれす
みぬれば、やがて尼にありぬかし、思ひたつほそいと心すめる様
にて、世にかへり見すべくもおもへらず、いであなかなし。かくはた
おほしなりにけるよさをやうに、あひられる人來訪ふらひ、ひたす

らにうしとも思ひはなれぬ男きよつけて、涙おとせば、つかふ人ふ
るでだちなさ、君の御心のあはれなりけるものを、あたら御身をな
さいふに、みづからひたひがみをかきさぐりて、あへなくこゝろを
そければ、うちひそみぬかし。若のおれさ、涙こほれそめぬれば、をり
をりよとにえねんじえず、くやしきこともおほかんめるに、ほとけ
もなか〜心ぎたなしとみ給ひつべし。におりに若めるほどより
も、かまうかびにては、却りてあしき道にもたゞよひぬべくぞおほ
ゆる。たへぬ宿世あさからで、尼にもなさを尋ねとりたらんも、やが
てそのおもひいでうらめしきふらあらざらんや。あしくもよくも
あいそひて、とあらんをりも、かゝらんきさみを、みすぐらたらん
中こそ、ちぎりふかくあはれならめ。我も人もうしろめたく、こゝろ
おかれじやは。またなのためにつろふかたあらん人をうらみて、氣

色ばみそむかん、はたをこがまじかりなん。心はうつろふかたありとも、みそめじ心ざしいとほしく思はゞ、さるかたのよすがにおもひてもありぬべきに、さやうならむたじろきに、たえぬべきわざなり。すべて、よろづのとなたらかに、怨すべきをば、みられるさまにほのめかし、うらむべからんふじをも、にくからずかすめなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。おほくいわが心も見る人から治まりもすべし。あまりむけにうちゆるべ見はなちたるも、心やすくらうたきやうかれを、をのづからろきかたにぞおやえ侍るかじ。つながぬふねのうきたるためしも、けにあやなし。さは侍らぬかといへば、中將うなづく。さしあたりて、をりしとも哀とも心にいらん人の、たのもれけなきうたがひあらんこそ、大事なるべけれ。わが心あやまちなくて見すぐさば、さしなほしても、おどかみざらんと

おほえたれど、それ、さしもあらじ。ともかくも、たがふべきふじあらんを、のこやかに見忍せんよりほかに、ますとあるまじけりといひて、我いもうどのひめ君は、このさだめにかなひ玉へりと思へば、君のうちねおりにて、言葉交せ給はぬを、さうとくしく心やましと思ふ。馬のかみ、ものさためのはかせになりて、ひゞらきるたり。中將のこの理りきよはてんと、心に入れてあへしらひる玉へり。よろづのよによそへておほせ、木のみちのたくみの、よろづのものを心にまかせてつくりいだすも、りんじのもてあそびもの、その物と跡もさだまらぬ、そはつきさればみたるも、けにかうもじつべかりけりと、時につけつよさまをかへて、今めかしきにめうつりて、をかしきもあり。大事として、まよにうるはしき人のてうどのかざりとする、さたまれるやうあるものを、なんなくしづるとなん、なほまよの

ものゝ上手は、さままにみわかれ侍る。又る所に上手おほかれど、
 すみがきにわらされて、つきくくにさらにおとりまさるけぢめ、ふ
 としゆみえわかれず。かゝれど、ひとのみおよそぬ蓬萊の山、あら海
 のいかれる魚のすがた、から國のはけしきけだものゝかたち、めに
 みわぬ鬼の顔なごのおそろくくつくりたるものゝ心にかまか
 せて、ひときは人のめをおそろかして、おちいにさらめど、さてあ
 りぬべし。よのつねの山のたゞづまひ、水のながれ、めにちかき人の
 家居ありさま、けにとみわ、なつかしくやはらいたるかたなごを、若
 づかにかまかせて、すぐよかならぬ山の氣色木おかく、世はなれて
 疊みあし、けちかきまがきの中を、そのこゝろしらひ、おきてなご
 をなん、上手はいといきほひに、わるものはおよそぬ所おほかん
 める。手をかきたるにも、ふかきとはなくて、こゝかゝこのてんか

にはしりぎき、そこまどなく氣色はめるい、うちみるに、かぞく
 とくけしきだちたれど、なほままのすぢを、こまやかにかきえたる
 い、うはべのふできえてみゆれど、今ひとたびとりならべてみれば、
 猶ほじちにかんよりける。はかなき事たにかくこそ侍れ。まして、人
 の心の時にあたりて、けしきはめらんみるめのなさけを、わたの
 むまじく思う玉へ侍る。そのはじめのま、すまゝと、忘くとも申し侍
 らんとて、ちかくるよれば、君もめさまと玉ふ(源氏物語)

おそどか	とりしま	なよびか	力無くや	びさうなきいへと
うじ	物事をつゝい	あそつか	淡々し	はかな
せそわ	ことなき主婦	つひのたのみ所	あたごと	き事
年よりた	出てうつり	終生身を共	にする所	ふるをたち
る女せも	のよき事	身を	揺る	そむつき
見ゆ	たじろき	舞	ひゞらき	かたは
る形				らより

清少納言

清少納言は、肥後守清原元輔の女あり。才學ありて文をよくし、また歌を巧みにせり。紫式部と同時代にして、一條帝の皇后藤原彰子に仕へて、大に寵遇せられしが、晩年に至りては、甚だ零落して、其生を終りきといふ。其著すところの枕草紙は、本邦隨筆の嚆矢にして、式部の源語と並べて、和文の雙璧と稱せらる。

○にくきもの

急ぐ事あるをりに、長言する客人。あなづらはしき人ならば、後になぞいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人いとにくし。

硯に髪の入りにてすられたる。又、墨の中に石こもりて、きしときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあら

で、外にある尋ねありく程に、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、悦びながら加持せさするに、このころ物崇に困じにけるにや、居るまゝに、即ちねぶり聲になりたる、いとにくし。何でふことなき人の、すゞろに、えがちに、物いたういひたる。火桶すびつなごに、手のうらうちかへし、皺おしのべなごして、あぶり居るもの、いつかは若やかなる人なごの、さはしたりし。老はみうたてあるものこそ、火桶のはたに足をさへもたけて、物いふまゝに、おしすりなごもすらめ。さやうのものは、人のもとに來て、ゐんとする所を、まづ扇して塵拂ひすて、居も定まらずひろめきて、狩衣の前、下さまにまくり入れても居るかじ。かゝることい、いひかひなきもの、際にかと思へど、少くよろしむもの、式部太夫、駿河前司をさしひしが、然せしなり。又、酒飲みて、赤き口を探り、髯あるものは、それを撫で、盃人に取らす

程のけしき、いみじくにくくと見ゆ。又飲めなごいふなるべし。身ぶるひをし頭ふり、口わきをさへひきたれて、わらはべのこうごのに参りてなご、謠ふやうにする、それとしも、誠によき人のさし給ひしより、心づきなると思ふなり。物うらやみし、身のうへなけき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかり、聞かまほしがりて、いひ知らぬをば怨じをしり、又、わづかに聞きわたる事をば、我もとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かんと思ふ程に泣く兒、鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。(中略)又、遣戸など荒くあくるも、いとにくし。少しもたぐるやうにてあくるは、鳴りやはする。あしうあくれば、障子などたためかし、こほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそ聲になのりて、顔のもとに飛びありく、羽風さへ身のほそにあるこそ、いとにくしけれ。さし

めく車に乗りて歩くもの、耳も聞かぬにやあらんと、いとにくし。我乗りたるは、其車の主さへ、にくし。物語などするにさし出でし我ひとり、才まくるもの、すべてさし出は、童も大人も、いとにくし。昔物語などするに、我知りたりけるは、ふと出でしいひくたしなどする、いとにくし。鼠の走りありく、いとにくし。あからさまにきたる子ごも、童を、らうたがりて、をかしき物を取するにならひて、常に來て居入りて、調度やうち散らしぬる、にくし。(中略)いま参りの、さしこけて、物しり顔ををしへやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。(中略)はなびて誦文する人。大かた家の男しうならで、高くはなびたるもの、いとにくし。蚤もいとにくし。衣の下におどりありきて、もたぐるやうにする。又犬の、もろ聲に長々となきあけたる。まがくしくにくし。乳母の男こそあれ、女は、されど近くも寄らねば、よし。男子を

ハ唯我物にして、立ちそひ領じてうしろみ、いさゝかもこの御事に
違ふものをバ讒し、人をバ人とも思ひたらず、怪しけれど、これがど
がを心に任せていふ人もなけれバ、處はいみじきおもゝちして、事
を行ひなごするよ。(枕草紙)

あなづらひしき 賤く劣 驗者 修驗者にて加 何でふとなき
人 何とすぐれた れる 持おせする人 思もよらず 得意とらに ころどの
國府 ぞやめく 音する ざとく きしめく 軋る車 才まぐる
殿 利口 新參 者 うしろみたる 助言など したる
ふる いま参り

壬生忠岑

忠岑は、從五位下安綱の子にして、和歌をよくし、貫之等と其名を齊しくせ

り、始め左近衛大將定國の隨身とあり、後に御書所に候し、累進して攝津の
大目とあり、五位に叙せられたり。

○兵衛佐貞文が家の歌合よ

春立つと いふさかりにや みよしのゝ

山もかすみて けさハ見ゆらん

○秋の夜月のいみじうあか、りーよ

久方の 月の桂も 秋ハなほ
もみぢすれさや 照りまさるらん

○中宮の御屏風よ

山里ハ 秋こそことに 悲しけれ

鹿の鳴く音に めをさまとつゝ

○后宮の歌合よ

みよしのよ 山の白雪 ふみわけて

入りにし人の おとづれもせぬ

○あひまれりける人の住居にまうでけるに

よみてつかをしける

すみよしと 海人の告ぐとも 長居すな

人忘れぐさ 生ふといふなり

○夏の夜をこゝぎすを聞きて

くるゝかと 見れば明けぬる 夏の夜を

あかずとや啼く 山ほとよぎす

○世の中常ならざ心憂かりしふる

ぬるがうちに みるをのみやの 夢といはん

はかなき世をも うつよと見す

○春のはじめに右大將の屏風の繪

春きぬと 人のいへども うぐひすの

鳴かぬかぎりや あらじとぞ思ふ

○友則が亡せにけるによめる

時にもあれ 秋やの人を 別かるべし

あるを見るたに 戀しよものを

○題知らず

夏はつる 扇と秋の 若らつゆと

いづれか先づの おかんとすらん

○題知らず

をしむべき 庭の櫻の さかりにて

心を花に まはうつりける

凡河内躬恒

躬恒は、其家微賤にして、其父祖を詳かにせざれども、極めて和歌をよくし、貫之忠岑等と並べ稱せらる。寛平中に甲斐の少目となりしが、醍醐帝之を召して、御書所に候せしめらる。延喜中に累進して、和泉の大掾となり、六位に叙せられたり。

○延喜五年二月十日宣旨より奉れる和

泉大將四十賀の料屏風四帖内より始めて

内侍督殿も賜ふ歌

山高み 雲るに見ゆる さくら花

心の行きて 折らぬ日ぞ無き

○山寺もありて人よやる

世をすて、山に入る人 山にても

なほうま時は いはちゆくらむ

○夏

老いぬれば かしらに白く 卯花を

折りてかさよん 見もまがふがに

○題知らむ

櫻花 雪もふるなり 三笠山

いざ立寄らん 名にかくるやと

○亭子院歌合

けふのみと 春を思はぬ 時たよも

たつことやすき 花のかけかは

○秋

我妹子が ころものすそを 吹返し

うらめづらしよ 秋の初風

○中秋

人知れぬ 音をやかくらん 秋とぎ乃

花咲くまでに 鹿の聲せぬ

○子日

ねたくこれ 子の日の松に ならまを

あなうらやまを 人にひかるよ

○秋

水の面の ふかく浅くも 見ゆるかな

紅葉のいろぞ 淵瀬なりける

○題知らず

いもやすく ねられざりけり 春の夜に

花の散るのみ 夢に見ゆつゝ

○山越

ともにわれ かへる山路の もみぢ葉の

おのがちりくゝ わかるべらなり

○山のかひは猿なく

わびしらに ましらな啼きそ 足引の

山のかひある けふにやあらぬ

(躬恒家集)

紀 貫之

貫之は藏人望之の子なり。最も和歌に巧にして、また散文にも妙なりき。延喜中御書所の預とあり、さまざまの官を経て、天慶中に木工權頭とあり、從四位下に叙せられ、その十九年に卒せり。後人歌仙を撰びて、貫之を右の第

一におき、以て柿本人麿に配せり。

○春立ちける日

袖ひぢて　むすびら水の　氷れるを

春たつ今日の　風やとくらん

○志賀の山越よ女の多くあへりけるよ
遣をしける

あづさゆみ　春の山べを　越えくれバ

道もさりあへず　花ぞ散りける

○題知らず

思ひかね　妹がりゆけバ　冬の夜の

川風さむく　千鳥なくかり

○河原左大臣の身まかりて後かの家よまかり

てありけるよ鹽竈といふ處の様を作れりけ
るを見てよめる

君まさで　けふり絶ゆるよ　鹽竈の

うらさびしくも　見ゆるたるかな

○人を別れける時よめる

とられてふ　あとい色よも　あらなくよ

心よ若みて　とびかるらん

○信濃よゆく人よ贈る

月かけを　あらず見るとも　更科の

山のふもとに　長るすな君

○藤原のふれをかゞ武藏介よて下る時逢
坂まで送りて

かつおらて 別れもゆくか 逢坂の

人たのめなる 名よあそ有りけれ

○紅葉の流るゝを見たる

もみぢ葉の 流るゝ時の 立田川

みなとよりあそ 秋のゆくらめ

○石山よまうでけるととき音羽山の紅葉を

みて

あき風の 吹しく日より 音羽山

峰のこぎゑも いろづきよけり

○延喜御時月次御屏風に

あふさるれ 關の清水よ 影もえて

今やひくらん もち月の駒

○題知らず

さくらちる 木の下あけと さむららで

空よゑられぬ 雪ぞふりける

さくら花 さきよけらしも 足引の

山のかひより ぞゆるゑら雲

(貫之朝臣家集)

袖ひやて

袖を濕
はして

むすびー水

手にて汲
みし水

あづさゆみ

辭冠

妹がり

妹か居る
ところへ

足引の

辭冠

○古今和歌集序

やまと歌の人の心を種として、萬の言の葉とぞなれをける世の中

よある人、おどわ、茂きものなれば、心よ思ふを、見るも此聞くものよつけて、云ひ出せるなり。花よ鳴く鶯、水よ住む蛙、此おるを聞けば、いさといけるもの、何れも歌を詠まざりける。力をも入れせしめて天地をうごかし、目よ見ゆぬ鬼神をも哀れとおもひせ、男女の中をも和らけ、猛きもの、ふれ心をも慰さむるの歌なり。おの歌、天地の開け始まりける時より出来よけり。然はあれども、世よつゝあるを、久あとの天よしては、若とてる姫よ始まり、あら金の地よしては、そされをの尊よりぞ起りける。千早ふる神代よは、歌の文字も定まらば、すなふして事此心よき難りけらし。人の代とありて、そさのをの尊よりぞ、三十文字あまり一ト文字の詠みける。斯くて、花を愛で、鳥を羨み、霞をあはれひ、露を悲しふ、心ことさ多く様々にかりにける。遠き所も、いでたつあしもとよりはじまりて、年月を涉り、

高き山も、麓のちりひちよりかりて、天雲たなびく迄、おひ昇れるが如くに、此の歌も、斯くの如く成るへし。浪花津の歌、帝はおん始めあり。あさか山の言の葉、うね女の戯れより詠みて、このふた歌は歌の父母のやうにて、そ、手習ふ人の始めにも若ける。抑も、歌のさま六つあり。唐の歌にも斯くぞ有へき。そのむくさの、一つに、添へ歌。おほささきの帝をそへ奉れる歌。

浪花津に 咲やこの花 冬おもり

今を春べと 咲くやこの花

といへる成るべし。二つには數へ歌。

咲花は 思ひつく身の あぢきなく

身にいたつきの いるも若らすて

と云へる成るべし。三つにいなすらへ歌。

君にけさ 朝の霜の おきていあバ

戀しきとに 消えやわたらむ

と云へるなるべし。四つにいたとへ歌。

我かこひの よむとも盡きじ ありそらみの

濱の眞砂子は よみ盡すとも

といへる成るべし。いつよにいたよおと歌。

いつはりの 無き世ありせば いかばかり

人の言の葉 うれしからまし

といへる成るべし。六つに祝ひ歌。

このどのの むべもとみけり さき草の

三つ葉四つ葉に どのづくりせり

といへるなるべし。今の世の中いろに付き、人の心花に成にけるよ

り、あだなる歌はかなき言のみ出てくれバ、色おのみのいへに、うも
れ木の人知れぬ事とありて、まめなる所にハ、花すよきはに出すべ
き事にもあらずなりにたり。其の始めを思へバ、斯るべくなんあら
ぬ。古しへの代々の帝、春の花のあした、秋の月の夜おとに。さふらふ
人々を召して、ことにつけつゝ歌を奉らしめ給ふ。あるハ、花をおふ
とて、便りなき所にまごひ、あるは、月を思ふとて、若るべなき闇にた
どれる心々を見給ひて、さがし愚かなりと若ろしめしけん。若かあ
るのみにあらず、さゞれ石に假へ、つくさ山にかけて君を願ひ、喜ひ
身に過ぎ、樂しひ心に餘り、富士の煙によそへて人をこひ、松むしの
音に友を忍ひ、高砂、住れ江の松もあひおひの様に覺ゆ、男山のむか
しを思ひ出で、をみなへしの一ときをくねるにも、歌をいひてそ
なくさめける。又、春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木の葉れ落つ

るをきよ、あるは、年毎に鏡の影に見ゆるゆきとあみとをなけき、草の露、水のあわを見て我身を驚き、あるは、きのふは榮々誇りて、時を失ひ世にわび、親しかりしも疎くなり、或は、松山の浪をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下た葉をなかめ、曉の鳴のそねびきを數へ、あるは、吳たけのうきふしを人に云ひ、芳野川をひきて、世の中をうらみきはるに今、富士の山も煙立たずなり、長良の橋も盡くるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。古へよりかく傳えらるるうちに、奈良の御時より弘まりにける。彼のおほん世や、歌の心を若ろしめしたりけん。かのおほん時に、おほきみつの位柿本人麿なん歌の聖りなりける。是は君も臣も身を合はせたりといふなるべし。秋の夕立田川に流るる紅葉をば、帝のおほん目に錦と見給ひ、春のあした、芳野の山の櫻は、人麿が心には雲かとのみなん覺えける。又、山部

の赤人と云ふ人あり、鬼歌にあやしくたへなりけり。人麿の赤人が上に立む事難く、赤人は人まろが下に立ん事難くなんありける。此の人々を置きて、又勝れたる人も、くれ竹の代々に聞ゆ、かたいどのよりくゝに絶へずぞありける。是より先の歌を集めて、萬葉集と名づけられたりける。此處に古の玉をも、歌の心をも知れる人、僅に一人ふたりなりき。然らばあれど、是彼得たる所得ぬ所、たかひになんある。彼の御時よりこのかた、年の百年餘り、世のつぎになん成りける。古の事をも歌をも、知れる人詠む人多からず。今此の事を云ふに、司さ位高き人をは易きやうなれば、いれず。其の外に、近き世に、その名聞ゆる人、則ち僧正遍照の、歌の様はゆたれ共、誠すくなじ。譬へば繪に描ける女を見て、徒らに心を動かすが如し。在原業平は、其の心餘りて言葉足らず。若ほめる花の色あくて、匂ひのおれるが

如し。文屋康秀の言を巧みにて、其のさま身においす。いハッあき人のよき、ぬ着たらんが如し。宇治の僧喜撰の言をかすかにして始め終り慥かならず。いはゞ秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し、詠める歌多く聞こねね、かれこれを通してよく知らず。小野小町の古の衣通姫の流なり。あはれかる様にて強からず。いハッよき女の疾めるところあるに似たり。強からぬの女の歌なればなるべし。大友黒主は其のさま卑し。いハッ薪おへる山人の花の影に休めるが如し。此の外の人々、其の名聞ゆる、野邊におふるかづらのさひひろおり、林に茂き木の葉のことくに多かれど、歌とのみ思ひて、其のさま知らぬなるべし。斯るに、今すべらぎの天の下若ろしめす事、よはの時九のかへりになんなりぬる。普きおほんうつくしみの涙、やしまの外まで流れ、廣きおほん恵みのかけつくさ山の麓より繁

くおとしまして、萬のまつりおとをきこしめす暇諸々の事を捨て給はぬあまりに、古の事をも忘れじ。舊りにし事をも起し給ふとて、今も見そなはし。後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所の預り紀貫之前のかひのさうくわん凡河内の躬恒、右衛門府生壬生の忠岑等に仰せられて、萬葉集にいらぬ古き歌、自からのをもたてまつらしめ給ひてなん。其が中に、梅をかさすより始めて、ほとよきすを聞き、紅葉を折り、雪を見るに至る迄、又鶴龜あつけて君を思ひ、人をもいはひ、秋萩夏草を見て妻をこひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるハ、春夏秋冬にもいらぬくさくの歌をなん撰させ給ひける。凡て千うたはたまき、名付けて古今集と云ふ。斯く此の度集め撰はれて、山した水の絶へず、濱の眞砂の數多く積りぬれば、今ハ飛鳥川の瀬になる怨もきこえず。さッれ石の巖

となる喜びのみぞ在るべき。それまくら詞は春の花の匂ひ少なくて、空しき名のみ秋の夜の永きをかこてれば。かつ人のみにおそり、且は歌の心に耻思へど、棚引く雲の起居。鳴く鹿の起き臥し、貫之等が此の世に同じく生れて、此の事の時にあへるをなん喜こひぬる、人麿なくなりたれど、歌のこと止まれるかな。假ひ時移り事去り、樂しび悲しひ往きかふ共、此の歌の文字あるをや。青柳の糸絶はず、松の葉の散り失せずして、まさきのかづらなかくつたり、鳥の跡久しくとゞまらば、歌のさまをも知り、言のこゝろを得たらん人は、おほ空の月を見るか如く、古を仰きて、今を戀ひさらめかも。

久かたの あら金の 千早ぶる みか冠 ちりひぢ 塵泥
あぢきなく 面白く いたつき 病 痾 さき草 冠 まめなる

所 まじめ くねる すね 鏡の影にみゆるゆきとなみ 髪白
ある所 冠 かたいと より合 とつぎ 世十
と面 吳たけ せぬ絲

○土佐日記

十一日、所かつきよりふねをいたして、室津をおふ。人皆まだねたれば、うみのありさまも見ゆす。たゞ月をみて、にらひむがををさるりける。かゝるあひたに、みな夜あけて手あらひ、れいのことゞもてひるになりぬ。今と羽根といふところは、鳥のさねのやうにやあるといふ。またをさなきわらへの事なれば、人々わらふに、有りける女わらはなん、このうたをよめる。

まことにて 名にきく所 羽根ならば

とおがとくくに みやこへもがな

とぞいへる。

をどこもをんなも、いかでとく都へもがなとおもふこゝろあれば、この歌よとにあらねど、けにと思ひて、人々わすれず。この羽根といふ所とふわらそのついでにぞ、又むかしのひとをおもひいで、いづれの時にかわする、けふまゝして、まゝのかならむこと、くたりとときの、人の數たらねば、ふるきうたに、數れたらでぞかへるべらなる、といふことを思ひいで、人のよめる。

よの中に おもひあれども 子をこふる

おもひにまさる 思ひなきかな

といひつゝなん。

室津をおふ

室津をさして漕きゆく

れいのことども

手洗ひ口漱き神を拜するまじの如き毎朝

定つてす

今と

添辭

○同

十九日、日あらければ、ふねいたさず。

廿日、きのふのやうなれば、船いださず。みな人々うれへなけく。くるしく心もとなければ、たゞ日のへぬる數をけふいくか、そつか、みそかと、かぢふれば、およびもそこなそれぬべし。いもねすいとわびし。廿日の月いでにけり。山のともなくて、海のなかよりぞいでくる。かうやうなるを見てや、むかし安部仲麿といひける人、もろこしにわたりて、かへり來たる時に、舟にのるべき所にて、かの國人うまのまなむけし、わかれをらみて、かしこのからうとつくりおとせける。

あかずやありけん、廿日の夜の月いづるまでぞありける。そのつき
の海よりぞいでける。これを見て、仲まろのぬら、わがくに、かよ
るうたをなん、神代より神もよみたび、今の上中下の人も、かうやう
にわかれをらみ、よろこびもあり、かならみもある時に、よむとて、
よめりける歌、

あをうあばら　ふりさけ見れば　かすがなる

三笠の山に　いでし月かも

とぞよめりける。かの國の人きよなるまじくおほえたれども、こと
の心を男もじにさまをかき出して、このことばつたへたる人に
いひおらせければ、心をやきよむたりけん、いとおもひのほかにな
んめでける。もろことと、このくにとと、ことばことなる物なれど、月
のかげの、おなじことなるべければ、人の心もおなじことにはやあら

ん。さて、今そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌、

都にて　山のそに見え　月なれど

浪より出て　なみにこそいれ

廿一日、うの時をかりに、舟いたす。皆人々の船いづ。これを見れば、春
のうみに秋のこのそらも、ちれるやうにぞありける。おほろけのね
がひによりては、やあらん。風もふかす、よき日いできて、こぎゆく。此
あひたにつかはれんとて、つきてくるわらのあり。それがうたふゆ
なうた、

なほこそ　國のかたの　見やらるれ　わがちよそ、

ありとしおもへば　かへらや

とうたふぞあそれなる。

かくうたふをきよつ、こぎくるに、くろ鳥といふ鳥、いそのうへに

あつまりをり。そのいはのもどに、なみ若ろく打よす。かぢどりのい
ふやう、くろき鳥のもどに、白きなみをよすとぞいふ。この言葉、なに
とにいなけれど、物いふやうにぞきおはたる。人のほとにあはねば、
とびむるなり。かくいひつゝゆくに、ふか君なる人、浪をみて國より
はじめ、かいづくむくいせんと、いふなることを思ふうへに、海の
またおそろしければ、かゝらも皆若らけぬ。なよそぢやそぢは、海に
あるものなりけり。

わが髪の 雪と磯べの 若ら波と

いづれまされり 沖津若ま守

かぢどりのいへり。

および びゆ うまのそなむけ 別 饒 あかす 別を惜 男もじ
字 濃 かへらや 拍子の詞歸りたき意 をも茲にてい含む也 若らけぬ 白くな りたり

僧正遍照

遍照は、良岑安世の子にして、俗名を宗貞といへり。仁明帝に仕へて藏人頭
とあり、和歌をよくするを以て其寵遇をうけしが、帝崩じてのち、剃髪して
慈覺大師に隨ひ、文徳帝の時に僧正となり、寛平二年に寂せり、年七十五。

○春

花の色は かすみにこめて 見せずとも

香をたにぬすめ 春のやま風

○五節の頃舞ひめを見侍りて

天つ風 雲のかよひち 吹とぢよ

をどめの姿 若らとゞめん

○雲林院の木蔭また、すみありきて
わび人の わきて立寄る 木のもとの

たのむ影なく もみぢ散りけり

○はちすに露のおきたるを

そちす葉の 濁りにたまぬ 心もて

何かと露を 玉とあさむく

○世のはかなさいとゞ思ひ知られて侍り

しかば

末の露 もとの雫や 世の中の

おくれ先だつ ためらなるらん

○大和のふるの山を見にまかるごと

いそのかみ ふるの山への 櫻花

うゑん時を ちる人ぢなき

○仁和の帝の位におはしまし、時ふる

の瀧御覧せんそておはしましける道

に遍照が母の家の侍りけるに宿りし

給へるに庭を秋野に作りていとをか

し御物語の序によみて奉りし

里のあれて 人のふりにて 宿なれや

庭もまがきも 秋の野らなる

○春花山に法皇のみゆきありてこく還ら

せ給ひなんこそせし時ふ

まてといそゞ いともかこし 花の山

ちほると鳴かむ 鳥の音もがな

○西大寺のほこりの柳を

あさ緑 絲よりかけて 白露を

玉にもぬける 春のやあきか

○さうぐしう侍りしかバ馬に乗りて物
にまかりし道に女郎花の見えしをおよ
びて折りし程に馬より落ちてぬしなが
ら

名にめでし 折れるばかりぞ 女郎花

これ落ちにきと 人に語るな

(僧正遍照集)

在原業平

業平は阿保親王の第五子にして、天長中在原といふ姓を賜はり、人臣に列せられたり、世に在五中將といふ、最も和歌に巧みなりき、元慶中に卒せり、年五十六。

○なぎさの院にて櫻の花を

世の中に たえて櫻の あかりせば

春のこゝろの のさけからまじ

○題知らず

大かたは 月をも愛でし これぞこの

積れば人の 老となるもの

○題知らず

おきもせず ねもせで夜を あかしての

春のものとして ながめ暮らさつ

○櫻の花盛りに久しくまゐらぬ人の許へ
まかりたれば

あたかりと 名よこそ立てれ 櫻はあ
とくにまれなる 人もまちけり

○布引の瀧のももにて人々歌讀むみ
ぬきみたる 人こそあるらし 白玉の

まなくも散るか 袖のせさきに

○人の許なる前裁み結びつけ侍りける
植ゑしうゑば 秋なき時や 咲かさらん

花こそ散らめ 根さへ枯れめや

○題知らず

ちもやぶる 神代もさかす 龍田川

からくれなるに 水くゝると志

○題知らず

けふこそすば あすの雪とぞ 降りなまし

消えずのありとも 花と見まらば

○題知らず

月やあらぬ 春やむかしの 春ならぬ

我身一つの もとの身にして

○題知らず

あかなくに まだきも月の かくるゝか

山の端にけて 入れずもあらなん

○題知らず

むらさきの 色こき時は めもはるに
野なる草木ぞ わかれざりける

○題知らず

そむくとて 雲には乗らぬ ものなれど
世の憂きことぞ よそになるてふ

○題知らず

かりくらし たなをたつめに 宿からん
あまの河原に われは來にれり

○病きてよわくなりける時

終に行く 道とのかねて きゝしかど
きのふけふとぞ おもはざりけり

(業平朝臣家集)

小野小町

小町は、仁明帝の頃の人にして美人の聞え高く、また和歌に巧みなりしか
と、其傳を詳かにせず。

○山里にて秋の月を

山里の あれたる宿を てらむつゝ
いくよへぬらん 秋の夜の月

○花をながめて

花の色に うつりにけりな いたづらに
我身よにふる ながめせしまゐ

○題知らず

やよやまで 山ほとよぎす 言づてん

われ世の中に すみわびぬとよ

○人の心の變りたるに

色見えて うつろふものハ 世の中の

人のこゝろの 花にぞありける

○題知らず

木枯らしの 風にも散らで 人知れぬ

うき言の葉の つもりぬるかな

○井手の山吹を

色も香も なつかしきかな 蛙鳴く

井出のわたりの 山吹のはな

○題知らず

あやしくも 慰めがたき こゝろかな

をば捨山の 月も見あくに

○定まらずあそれなる身を嘆きて

あまのすむ 浦こぐ舟の かちを絶ゆ

世をうみわたる 我ぞこびとさ

○題知らず

われのみや 世をうぐひすに 啼きわびん

人のこゝろの 花に散りなば

○題知らず

吹きむすぶ 風はむかし 秋ながら

ありしにも似ぬ 袖のつゆかな

(小野小町家集)

失名氏

○伊勢物語

昔男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京に居らじ、東の方に住むべき所求めにて往きけり。信濃國、淺間の岳に、烟の立つを見て、

信濃なる 淺間のたけに たつけふり

遠方人の 見やはとがめぬ

もとより友とする人、一人二人して、諸共に往きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河の國、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の、蛛手に流れ別れて、橋八つ渡せるによりて、八橋とはいへる。その澤の邊の木蔭におり居て、かれいひくひけり。その澤に、燕子花いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人のいは

く、かきつはたといふ五文字を、句の上に据ゑて、旅の心をよめといひければ、よめる。

唐衣 きつゝなれにし つまらあれば

はるくきぬる 旅をしぞ思ふ

とよめりければ、皆人、かれいひの上になみだ落ちて、ほとびにけり。ゆきくゝて、駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて、我いらんとする道に、いと暗う細きに、蕩葛の若けりて、物心細く、すゞろなるめを見る事と思ふに、修行者逢ひたり。かゝる道に、いかでかおはするといふに、見れば、見し人なりけり。京に、その人の許にて、文書きてつく。

駿河なる うつの山邊の うはしにも

夢にも人の 逢えぬなりけり

富士の山茂見れば、五月のつこもりは、雪いと白う降りり。

時あらぬ 山の富士の嶺 いつとてか

かのこまたらに 雪のふるらん

その山は、こゝに譬へば、比叡の山を、二十ばかり重ねあけたらんは、
として、形の鹽尻のやうになんありける。おほ、ゆきくゝて、武藏の國
と下總の國との中に、いと大なる河あり。それを隅田川といふ。その
河の邊に群居て、思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなど、わび
あへるに、渡守はや船に乗れ。日もくれかんといふに、乗りて渡らん
とするに、皆人、物わびとくして、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折
しも、白き鳥の、喙と足と赤き、鴨の大きかる、水の上に遊びつゝ、魚を
食ふ。京に、見ゆぬ鳥なれば、皆人、見しらす。渡守に問ひければ、これ
なん都鳥といふを聞きて、

名にし負はゞ いぎ言問はん みやこ鳥

我おもふ人は ありやなしやと

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。

昔男、いとうるはしき友ありけり。片時去らずあひ思ひけるを、他の
國へいきけるを、いと哀と思ひてわかれけり。月日經ておこせたる
文に、あさましう對面せで、月日の經にけること、忘れやと給ひにけ
ん、といたく思ひわびてかん侍る。世の中の人の心は、めかるれば忘
れぬべき物にこそあんめれといへりければ、よみてやる。

めかるとも おもほゆなくに 忘らるゝ

時をかければ 面かけにたつ

やうなき 益なき すゞろ 思ひざ 鹽尻 鹽を取る爲に砂鹵を積み
て作れる塚やうのもの

めかる 眼をはなす事即
ち見ぬことあり

失名氏

○大伴御行の大納言の事

大伴御行の大納言は、我家にありとある人を召し集めて、の給はく、龍の首に、五色の光ある玉あり。それを取りて奉りたらん人へ、願はん事をかなへんどのたまふ。男ども、仰せの事を承りて申さく、仰せのことは、いとも尊む。たゞし、この玉容易く得取らざるを、況や、龍の首の玉は、いかゞ取らんとまうとあへり。大納言の給ふ、君の使といはんものは、命を捨て、己が君の仰せ事を、かなへんことを思ふべけれ。この國になき、天竺唐土の物にもあらず。この國の海山より、龍は降り登るものなり。いかに思ひてか、汝等難き物と申すべき。男ども申すやう、さらば、如何はせん。難きものなりとも、仰せ事に従ひて、求めにまからんと申す。大納言見笑ひて、汝等、君の使と名

を流しつ。君の仰せ事を、いかゞの背くべきとの給ひて、龍の首の玉取りにて、出したて給ふ。この人々の道の糧食物に、殿のうちの絹綿錢などある限り取り出て、そへて遣はす。この人々ども、歸るまで、いもひをして我は居らん。この玉取り得て、家に歸り來よとの給せせけり。おのゝ仰せ承りて、罷り出でぬ。龍の首の玉取り得ずば、歸り來よとの給へば、何地もゝ足の向きたらんかたへいなんとす。かゝるすき事を給ふことと誹りあへり。賜はせたる物へ、おのゝ分けつゝとり、或は己が家に籠り居、或はおのがゆかまほき所へいぬ。親君と申すとも、かくつきなきことを仰せ給ふことと、こともゆかぬ物ゆゑ、大納言を誹りあひたり。かくや姫すゑんに、例のやうに見にくしとの給ひて、麗しき屋をつくり給ひて、漆を塗り蒔繪をし、いろへ給ひて、屋の上は、絲を染めて、いろゝに

葺かせて、内々の志つらひに、いふべくもあらぬ綾織物に、繪を書きて、間正とよはりたり。もとの妻ともい去りて、かぐや姫を、かならずあゝんと設けして、獨り明ら暮ら給ふ。遣はし人、夜晝待ち給ふに、年越ゆるまで音もせず。心もとながりて、いと忍びて、たゞ舍人二人召繼として、やつれ給ひて、難波の邊におもひまゝして、問ひ給ふことは、大伴大納言の人や、船に乗りて龍殺して、其が首の玉取れるとや聞くと問はするに、船人答へていはく、怪しき事かなと笑ひて、さる業する船もなしと答ふるに、をぢなきおとする船人にもあるかな。得知らでかくいふとおやして、我弓の力は、龍あらば、ふと射殺して、首の玉は取りてん。遅く来るやつを待たじとの給ひて、船に乗りて、海毎にありき給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出で給ひぬ。如何しけん、はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きも

てありく。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入れぬべく吹き廻して、浪の船に打ち掛けつゝ捲き入れ、神の落ちかゝるやうに閃きかゝるに、大納言の、惑ひて、またかゝるわびしきめに見ず。いかならんとするぞとの給ふ。楫取答へて申す、こゝら船に乗りてまかりありくに、まだかくわびしきめを見ず。御船海の底に入らず、神落ちかゝりぬべし。もし、さいはひに神の助あらば、南海に吹かれおとしぬべし。うたてある主の御許に仕へ奉りて、すゞろなる死をすべかんめるかなとて、楫取泣く。大納言、これを聞きての給はく、船に乗りては、楫取の中す事をこそ、高き山とも頼め。なほかくたのもしけなきおとを申すぞと、あをへををつきての給ふ。楫取答へて申す、神ならねば、何わざをか仕う奉らん。風吹き浪激しけれども、神さへいたゞきに落ちかゝるやうなるは、龍を殺さんと求め給ひさふら

へば、かくあなり。はやても龍の吹かするなり。はや神に祈り給へといへば、よき事なりとて、楫取の御神きこしめせ。をぢなく心幼く、龍を殺さんと思ひけり。今より後は、毛一筋をたに動かさ奉らじと祝詞をはなちて、立居なくく呼び給ふ事、千度はかり申し給ふけりやあらん。やうく神鳴りやみぬ。少し明りて、風は猶ほはやく吹く。楫取のいはく、これハ龍のわざにこそありけれ。この吹く風ハ、よき方の風あり。あしき方の風ハ、あらず。よき方に赴きて吹くなりといへども、大納言は、是を聞き入れ給はず。三四日吹きて、吹き返さよせたり。濱を見れば、播磨の明石の濱ありけり。大納言、南海の濱に吹きよせられたるにやあらんと思ひて、息つき伏し給へり。船に在る男ども、國に告げたれば、國の司まうで訪ふにも、え起きあがり給はで、船底に臥し給へり。松原に御筵敷きて、おろし奉る。その時に、南

海にあらざりけると思ひて、辛うじて起き上り給へるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふをれ、こなたかなたの目ハ、李を二つ附けたるやうなり。これを見奉りて、國の司もほゝゑみたる。國に仰せ給ひて、腰輿作らせ給ひて、にようく荷はれて、家に入り給ひぬるを、いかでか聞きけん。遣はし、男ども参りて申すやう、龍の首の玉を、え取らざりしかばなん、殿へも得参らざりし。玉の取り難かりしことを知り給へればなん、勘當あらトとて、参りつると申す。大納言、起き出でよの給はく、汝等よく持て來ずなりぬ。龍は鳴神の類にてこそありけれ。それ玉を取らんとて、そこの人々の、害せられかんとしけり。まして、龍を捕へたらましかば、また、こともなく、我ハ害せられなまじ。よく捕へずありにけり。かぐや姫てふ大盗人のやつが、人を殺さんとするなりけり。家のあたりだに今は通らじ。男ども

おも、なありきそとて、家に少し残りたりけるものども、龍の玉取
らぬものどもに賜ひつ。是れを聞きて、去り給ひしものうへ、腹
をきりて笑ひ給ふ。絲を茸せてつくりし屋、鳶鳥の巢に皆咋ひも
て往にけり。世界の人のいひけるは、大伴の大納言、龍の玉を取り
ておのしたる。否、さもあらず。御眼二つに、李のやうなる玉をぞ添へ
ていましたるといひければ、あなたへがたといひけるよりぞ、世に
合はぬ事をば、あなたへがたといひ始めける。(竹取物語)

いもひ もの すき事 好 つきかきあと 俗にいふつ こと
もゆかぬ 合點の あはんど 妻にせ 召繼 めしつ をぢな
きこと 拙き うたである うたてきと いふに同じ 風いと重き人 風邪
く犯さ によやく うめ 大盗人 罵りて云 腹をきりて
腹の切る、様 に笑ふをいふ

大伴家持

家持は、大納言旅人の子なり。天平年中越中守に任せられ、從五位下に叙せ
られき。官位是より次第に進みて、天應年中に左大辨となり、從三位に叙せ
られしが、延暦元年に、氷上川繼の事によりて、一度官位を褫かれしも、程な
く本に復せられて、同じ三年には持節征東將軍となり、その四年に薨じた
り。この人は萬葉集の撰者の一人なり。

○家持作歌一首竝短歌

わがやせに そな ざさきたる そを みれど こ ころもゆかず
そしきや いも がありせば こ かもなき ふ たまならひる
たをりても み せまらものを う つせみの か れるみなれば
つゆらもの け ぬるがごとく あ らびきの や まぢをさして

いりひあす かゝりにしかば そこもふに むねこそいため
いひもかね なづけも若らに あともあき よのなかなれば
せんすべもあし

ときさしも いつもあらんを こゝろいたく

いでゝゆく みち若らませば わくこをおきて

いもがみし やどにそなさく ときいへぬ

わがなくなみた いまだひなかくに

はしきやし 愛す みかもなす 水鴨の 如く

はしきやし 愛す みかもなす 水鴨の 如く

○忽^ニ沉^ニ疴^ニ疾^ニ殆^ニ臨^ニ泉^ニ路^ニ仍^ニ作^ニ歌^ニ詞^ニ以^ニ申^ニ悲^ニ緒^ニ一^ニ首

竝短歌

おほきみの まけのまにく ますらをの こゝろふりおこし
あしびきの やまさかこえて あまさがる ひなにくたりき
いきたにも いまだやすめず としつきも いくらもあらぬに
うつせみの よのひとかれば うちなびき どこにこいふし
いたけくの ひにけにまさる たらちねの はゝのみことの
おほおねの ゆくらゆくらに 若たおひに いつかもこむと
またすらん こゝろさおしく はしきよし つまのみことも
あけくれバ かどによりたち ころもでを をりかへしつゝ
ゆふされバ ところちをらひ ぬべたまの くろがみしきて
いつじかど なげかすらんぞ いもゝせも わかきこどもは

をちこちに さわぎあくらん たまがこの みちをたどほみ
まづかひも やるよしもあし おもほしき ことつてやらず
こふるにし こよろいもいぬ たまぎたる いのちをしげと
せんすべの たどきをしらぬ かくしてや あらしをすらに
なけきふせらん

よのあかり かすかきものか てるさなの

ちりのまがひに 若ぬべきおもへば

やまかはの そきへをとほし せしきよし

いゆをあひみず かくやなげかん

まけのまにく

命の儘に

あしびき あまぎかる

たらちね

の ぬべたまの たまがこの たまぎはる

皆冠

いたけ

くの云々

病患日々
に重なる

さぶしく

悲し

あらしを

ますらを
に同じ

○賀陸奥國出金 詔書歌一首並短歌

あしらの みづほぐにを あまくたり 若らしめしける
すめろきの かこのみことの みよかさね あまのひつぎと
若らしくる きみのみよく 若きませる よものくにし
やまかはを ひろみあつとと たてまつる みつきだからは
かそへはす つくしもかねつ 若かれども わがおほきみの
もろびとを いぎなひたまひ よきことを はしめたまひて
くがねかも たのしげくあらんとおもほして、若たなやますに
どりがなく あづまのくにの みちのくの をたなるやまに
くがねありと、まうしたまへれ ところろを あきらめたまひ

あめつちの かみあひうづなひすめろぎの みたまたすけて
 とほきよに かよりしことを わかみよに あらそしてあれは
 みをすぐりにさかえむものと かむながら おもほしめして
 ものよふの やそどものを、 まつろへの むけのまにく
 おいびども めのわらひこも 若かねがふ こよろたらひに
 なでたまひ をさめたまへば こゝをさも あやにたふとみ
 うれしけく いやよおもひて
 おほともの とほつかんおやの そのなをバ おほくめぬと
 おひもちて つかへしつかさ うみゆかバ みづくかそね
 やまゆかバ くさむすかバね おほきとの へにこそ若なめ
 かへりみは せしとことたて ますらをの きよきそのを
 いにしへよ いまのをつゝに ながさへる おやのこともぞ

おほともと さへきのうちひ ひとつおやのたつることたて
 ひどのこい おやのあたゝす おほきみお まつろふものと
 いひつける ことをつかさぞ あづさゆえ てにどりもちて
 つるぎたち ことにどりはき あさまより ゆふのまゆりに
 おほきみの みかどのまゆり われを置いて、またひとあらしと
 いやたて おもひしまさる おほきみの ことこのさきの
 きけわたふとみ

反歌二一首

おほともの とほつかむおやの おくつきり
 若るくしめたて ひとの若るべく
 すめろぎの みよさかねんと あづまなる
 みちのくやまに かねをなさく

くがね 金 たのしけく 樂し 忘たなやます 御心のうち
思ひ患み給ふ
治め給ふ
まゝに
 かみあひうづあひ 諸神も
あひ助け むけのまにく
 こゝろたらひよ 心足る
やうに いにしへよ 古よ ながさへる
宋流 いやたて 先祖のこと立し
を一層たてゝ 忘めたて 標立 あり

○悲世間無常歌一首竝短歌

あめつちの とほきはしめよ よのなかの つねなきものど
 かたりつき かがらへきたれ あまのそら ふりさけみれば
 てるつきも みちかけしけり あしびきの やまのこぬれも
 はるされば はかさきにほひ あきづけば つゆしもおひて
 かせまじり もみぢちりけり うつせみも かくのみならし

くれなるの いろもうつろひ ぬをたまの くらかみかはり
 あさのゑも ゆふべかいらひ ふくかせの とほぬがごとく
 ゆくまづの とまらぬごとく つねもかく うつろふみれば
 にそたづと ながるゝなみた とゞめかねつも

反歌

ことよはぬ ますらはるさき あきづけば
 もみぢちらくは つねをかみこそ

(萬葉集)

山上憶良

憶良は文武天皇大寶の初に遣唐少録となり、伯耆の守を経て、聖武天皇の

朝に筑前の守に任せられたりといふ其履歴委しく傳らず。

○令反感情歌

あゝはゝを みればたふとし めこみれば めぐらうつくし
よのなかは かくぞことわり もちどりの かゝらはしゆよ
ゆくへ若らねば うけぐつを ぬぎつることく ふみぬぎて
ゆくちふひと いはきより なりでし人か ながなのらさね
あめへゆかは ながまにく つちあらば おほきみいます
このてらす ひつきのしたい あまぐもの むかぶすきはみ
たにぐゝの さわたるきはと きこしをす くにのまほらぢ
かにかくに ほしきまにく 若かにはあらじか
ひさかたの あまぢいとほし おほくくに
いへにかへりて なりをとまさに

令反感情 感情を論じて本情に反らしむるなり めこ 妻 めぐらうつくし 惠
愛し む もちどりの 冠 うけぐつ 子 破れ な ながなのらさね み
汝が名を 名 たにぐゝ 蝦 まほら 奥 なりをとまさに 葉
よ を せ

○思子等歌一首

うりはめば こともおもほゆ くりはめば まして若ぬはゆ
いづくより きたりしものぢ まあがひに もとなかゝりて
やすいしなさぬ
若ろかねゆ こがねもたまゆ なにせむに
まされるたから こに若かめやゆ

まながひに云々

目前に居るが
如く思はれて

やすいとなさぬ

安眠する
能はず

○貧窮問答歌一首並短歌

かせまどり あめふるよの あめまじり ゆきふるよは
すべもかく さむくしあれば かたしほを とりつゞしろひ
かすゆさけ うちすしろひて ちはおかひ はなびらびら
若かどあらぬひけかきなでよ あれをおきて、ひとはあらじと
ほころへど さむくしあれを あさおすま ひきかよふり
ぬのかたぎぬ、ありのことく きそへども さむきよすかを
われよりも まづしきひとの ちよは、い うゑさむからん
めこともは こひてなくらむ このときは いかれしつゝか

ながよはわたる

あめつちは ひろしといへど あがためい せほくやなりぬる
ひつきは あかしといへど あがためは てりやたまはぬ
ひとみなか われのみやとかる、わくらをに ひとよはあるを
ひとあみに あれもなれるを わたもあき ぬのかたぎぬの
みるのおと わ、けさがれる かよふのみ かたにうちかけ
ふせいほの まけいほのうち、ひたつちに わらどきときて
ちよは、い まくらのかたに めこともは あどのべに
かくみるて うれへさまよひ かまよには けぶりふきたてず
こしきにそ くものすかきて いひかしく こともわすれて
ぬの鳥の のどよひをるに いどのきて みじかきものを
はしきると いへるがとく 若もとゝる さとをさがこゑは

ねやどまで きたちよバひぬ かくばかり すべなきものか
よのなかのみち

よのなかを うしとやさしと おもへとも

とびたちかねつ とりにはあらねバ

かたしほ 塊りた かすゆさけ 濁 すゝろひ すゝ 志は

ふかひ 志はふき はなびし はなひの ほころへど

誇れ ありのおとこと 在る きそへとも 若襲へ わくらバ

に たま みるのおと 海松の ぬの鳥の 冠 いとのみきて

いと しもと 杖 やさしと 耻つか しと

○老身重病経年辛苦及思兒等歌五首 長一短四

たまぎはる うちのかきりは たひらけく やすくもあらんを
こともなく もなくもあらんをよのなかの うけくつらけく
いとのきて いたきゝすには から志ほをそゝぐちふがことく
ますくも おもきうまにゝ うはにうつと、いふことのとと
おいにてある、わがみのうへに やまひをら くはへてあれバ
ひるはも なけかひくらと よるはも いきつぎあか
としながく やみしわたれバ つきかさね うれへさまよひ
ことくは 志あゝとおもへバ、さバへなす さわくことおもを
うつてゝは 志には志らす みつゝあれバ、こゝろはゆるぬ
かにかくに おもひわづらひ ねのみしあかゆ
なぐさむる こゝろはあしに くもがくれ
あきゆくどりの ねのみしなかゆ

すべもなく くるこくあれは いではり
 いなととおもへど くらにさやりぬ
 みあわなす もろきいのちも たくあはの
 ちひろにもがと ねがひくらとつ
 若づたまき かずにもあらぬ みにはあれど
 ちとせにもがと おもほゆるかも

(萬葉集)

たまぎはる 冠 もなく 禍な
 ら 添 辞 ことく 外の辛苦
 障 へら 泡 水 若づたまき
 辞 冠 さいへなす 辞 冠 最
 やまひを さやりぬ

失名氏

○藤原宮之役民作歌

やすみしよ わかおほきみ たかひかる ひのみこ
 あらたへの ふちいらがうへに、をすぐれを めしたまひむと
 みあらかい たかいらさんと かなながら おもほすなべに
 あめつちも よりてあれこそ いまむしの あふみのくはの
 ころもでの たながみやまの まきさく ひのつまでを
 ものふの やそうちがまに たまもなす うかべあがせれ
 そをとると ささぐみたみも いへわすれ みもたかいらす
 かもじもの みづにうきゐて わがつくる ひのみかどに
 若らぬくにより こせぢより わがくには どこよにならむ
 ふみおへる あやしきかめも あたらよと いづみのかせに

もちこせる まきのつまでを もゝたらず いかたにつくり
 のほすらむ いそはくみれば かむあがらならし
 やすみしゝ たかひかる いはゞし ころもでの かもじ
 もの もゝたらず みな 冠辭 ひのみこ 日神の裔 即ち天子 みあらか
御在 所 まきさくひのつまで 袖人がきり出 したる材木 みもたな忘れず
我身を 忘れて いそはくみれば 勤むるを 見れば

○天皇崩御時婦人作歌一首

うつせみし かみにたへねば はなれるて あさなけくきみ
 さかりゐて わがこふるきみ たまならば てにまきもちて
 きぬならば ぬぐときもなく わがこひむ きみぎぎのよ

いめにみわたる

うつせみし 現の身し かみにたへねば 神となり 給へば さかりゐ
は添辭 離れ 居て きぎのよ 昨夜

○羈旅歌一首並短歌

未審作者

わたつみい あやしきものか あはぢしま なかにたておきて
 忘れなみを いやにめぐらし るまぢづき あかしのとゆは
 ゆふされば 忘れをみたしめ あけされば 忘れをひしむ
 忘れさるの なみをかこみ あそぢしま いそがくりゐて
 いつしかも このよのあけんどまつからに いのねがてねは
 たぎのへの あさぬのきゞし あけぬとし たちさよむらし

いざこども あへてこぎでむ にはも若つけし
若まづたひ みぬめのさきを こぎためば

やまとこひしく たづさはになく

るまぢづき 冠 辭 あかしのとゆ 明石の 門より 若ほさるの

鹽の 騒き

には 海 面 こきためば 漕き廻 れば

○詠水江浦島子一首竝短歌

はるのひれ かすめるときに すみの白の きしにいであて
つりおねの とをらふみれば いにしへの ことぞおもほゆる
みづの白の うら若まのこが かつをつり たひつりほこり
なぬかまで いへにもこずて うなさかを すぎてこぎゆくに

わたづみの かみのをどめに たまさかに いこきむかひて
あひかゞらひことありしかば かきむすび どこよにいたり
わたづみの かみのみやの うちのへの たへなるどのに
たづさとり ふたりいりあて おいもせず 若にもせずして
どこしへに ありけるものを よのなかの 若れたるひとの
わぎもこに のりてかたらく 若まらくは いへにかへりて
ちよはよに ことをものらひ あすのごと われなきなんと
いひければ いもがいへらく どこよべに またかへりきて
いまのこど あはむとならば このくしけ ひらくなゆめと
そこらくに かためらおとを すみの白に かへりきたりて
いへみれど いへもみかねて さとみれど さともみかねて
あやしと そこにおもひく いへゆでよ みどせのほそに

かきもなく いへうせめやと このはこそ ひらきてみては
 もとのごと いへはあらんと たまくしけ すこしひらくに
 若らくもの はこよりいでよ どこよべに たなびきぬれば
 たちはしり さげびそぞふり こいまろび あらずりしつゝ
 たちまちに こゝろけうせぬ わかゝりし はたも忘れみぬ
 くろかりし かみも忘れぬ ゆなくは いきさへたえて
 のちつひに いのち忘れける みづのえの うら若まのこが
 いへどころみゆ
 どこよべに すむべきものを つるぎだち
 若がこゝろから おぢやこのきみ

(萬葉集)

うなさか 坂海 あひかゞらひ ひ 相誘 かきむすび ひ 契りあひて

太安麻呂

安麻呂は、神八耳命の遠裔にして、文武天皇の時の人あり、博學強記、最も文章を能くしき、和銅四年、天皇の旨を奉じて古事記三卷を作れり、實に本朝編史の嚆矢あり、八年、累進して從四位下に叙せられ、靈龜中、民部卿に任ぜられき、養老七年卒せり。

○八俣遠呂智の段

かれ、やらせむて、いづものくにのひのかまかみある、とりかみのと

忘れたる 愚なる わぎもこ 海神の女を指す いまのごと 今のひ
 らくなゆめ 決して開く勿れ ところらく 多許 いへゆで、 家より出て、
 ゆなくは 終に つるぎだち 冠辭 しむが 己が

ころにくたりまじき。このをりとも、はらそのかはよりあがれくだりき。こゝに、すさのをのみこと、そのかはかみひとありけりとおほして、まきのほりいでまじゝかバ、おきあとおみなと、ふたりありて、をどめをかかひすゑて、なくあり。いましたちは、たれぞと、ひたまへバ、そのおきあ、あは、くはつかみ、おほやまづまのかみのこあり。あがなは、あしなづち、めがなは、てなづち、むすめがなは、くはかだひめとまをすとまをす。また、いまのなくゆゑのかにぞと、ひたまへバ、何がむすめは、もとより、やをとめありき。こゝに、このやまたをろちあも、ととてきてくふなる。いま、それきぬべきときあるがゆゑに、かくとまをす。そのかたちは、いかさまにかとひたまへバ、それがめえ、あのかがあして、みひとつに、かしらやつ、をやつあり。また、そのみにこけ、またひすぎおひ、そのながさ、たにやたに、を

やをゝわたりて、そのはらをみれば、ことごとくに、いつも、ちあひたゞれたりとまをす。かれ、はやすさのをのみこと、そのおきなに、これいまのむすめならば、あれにたてまつらむやとのりたまふに、かゝりければ、みなを忘らすとまをせば、あは、あまてらすおほみかみのいろせなり。かれ、いまあめよりくたりまじつとこたへたまひき。ここに、あしなづち、てなづちのかみ、若かまさば、かゝこゝに、たてまつらむとまをじき。かれ、はやすさのをのみこと、すなはち、そのをどめをゆつゝまじりにとりなして、みゝづらにきさして、そのあしなづち、てなづちのかみにのりたまはく、いましたち、やしほをりのさけをかみ、またかきをつくりもどほら、そのかきに、やつのかどをつくり、かどとに、やつのさすきをゆひ、そのさすきおとに、さかふねをおきて、ふねとに、そのやしほをりのさけをゆりて、まちてよどのり

たまひき。かれのりたまへるまゝにして、かくまけそあへて、まつと
 きに、かのやまたをうち、まことはいひしがおときつ。すなはち、ふね
 ごとく、おのもくくかいらをたれて、そのさけをのみき。こゝに、のみ
 忍ひて、みなふしねたり。すなはち、はやすさのをのみこと、そのみ
 かせるとつかつるぎをぬきて、そのをうちをきりはふりたまひし
 かば、ひのかいちになりてあがれき。かれそのあかのをよきりたま
 ふとき、みはかしのは、かけき、あやしとおもほして、みはかしのさ
 きもちて、さしききてみそなはしよかば、つむかりのたちあり。かれ、
 このたちをどらして、あやしきものぞとおもほして、あまてらすお
 ほみかみにまをらあけたまひき。こゝくさなぎのたちなり。(古事記)
 やらはへて 放逐せ まきのほり 覓め あかかぐち は、
たにやたにをやを たれ 谷又谷 上る 崖又崖 ゆつゝまぐし 齒の繁く ある櫛 みよづ

ら 鬘 やしほをり 幾度も絞りたる さすき さし みはか
 刀 御佩 酒にて美酒なり さ さ さ

○意祁命御論の段

すめらみこと、そのちよみこをころしたまへるお布はつせのすめ
 らみことを、ふかくうらみまつりて、そのみたまにむくいむとおも
 ほしき。かれ、そのおほはつせのすめらみことのみまかをやぶらむ
 とおもほして、ひとをつかはすときに、そのいろせ、おほけのみこと
 のまをらたまはく、このみはかをやぶらむに、あたらひとをつかそ
 すべからず。もはら、あれみづからゆきて、おほきみのみこところのお
 とやぶりて、まゐてこむとまをらたまひき。かれ、すめらみこと、若か

らば、みことのまに、いでませとのりたまひき。こゝをもて、おほ
 けのみこと、みよづからくだりいでまして、そのみとかのかたへを
 すこしほりて、あへりのほらして、すでにほりやおりぬとまをた
 まひき。こゝに、すめらみこと、そのはやくかへり上りませることを
 あやしまして、いかさまにやおりたまひぢとのりたまへば、か
 のみとかのかたへのつちをすおしほりつとまをたたまひき。すめ
 らここのりたまへく、ちよみこのあたをむくいむとおもふなれ
 ば、かならず、かのみとかを、こゝにやおりてむを、あぞすこしほ
 りたまひぢとのりたまへば、まをたたまへく、若かゝつるゆゑは、
 ちよみこのあたを、かのとたまにむくいむとおもほすは、まことに
 ことわりあり。若かれども、かのおほはつせのすめらみこと、ちよ
 とこのあたに、あれども、かへりて、あがをぢにまゑ、また、あめの

した若ろしめしよすめらみこと、にますを、いま、ひとへにちよみこ
 のあたといふこゝろ、さしをのみとりて、あめの若た若ろしめしよ
 すめらみことのみとかを、こゝにやおりなば、のちのひと、かな
 らず、そしりまつりてむ。たゞ、ちよみこのあた、むくいず、ある
 べからず。かれ、かのみはかのへを、すこしほりつ。すでにかくはちみ
 せまつりつれば、のちのよに若めすにもあへなむ。かくまをたたま
 ひつれば、すめらみこと、これもまたいとことわりなり。みことのを
 とくてよしとぞ、のりたまひける。(古事記)

山部赤人

赤人は、世に歌仙と稱せらる。人麿と其時を同くし、また其名を齊しくせり。

紀貫之は此二人を評して、人歴は赤人の上に立ち難く、赤人は人歴か下に立ち難しといへり。されど其傳は詳ならず。

○望不盡山作歌一首竝短歌

あめつちの わかれし時ゆ かんさびて 高くたふとき
するがなる 不二の高根を 天の原 ふりさけみれば
わたる日の かけもかくろひ、てる月の 光もみえず
白雲も いゆきはゞかり、ときとくそ 雪はふりける
かたりつき、 いひつきもかん、不二の高根の

反歌

たおの浦ゆ うちいでゝみれば ましろにぞ

不二の高根に 雪はふりける
時ゆ 時よ かんさびて 神威あ いゆき 添 ときとく 辞

時あ
ら声

○山部宿禰赤人作歌二首竝短歌

やすみしゝ わがおほきみの たか若らす よしぬのみやは
たゝあつく あをがきこもり かはなみの きよきかふちぞ
はるべし はなさきをより あきされば きりたちわたる
そのやまの いやますくゝに あのかはの たゆることなく
よしきのおほみやびとい とはにかよはん
みよしぬの きさ山のまの こぬれには

こゝたもさわぐ どののおゑかも
やすみしゝ たゝあつく みな あをがきこもり 冠 青山四方に 廻 廻れるん

とはに いつま こぬれ 梢 こゝた 山澤

やすみとよ わがおそきみは みよとぬの あきつのをぬの
ぬのべにの とみすゑおきて みやまにの いめたてわたと
あさがりに 若ふみおこし ゆふがりに とりふみたて
うまなめて みかりぞたよす はるの若けぬに

あしひきの やまにもぬにも みかりびと

さつやたささみ とたれたるみゆ

とみ 鳥獸の跡を 求むる人 いめ 射部 うまなめて 馬を並へて

○山部宿禰赤人作歌一首竝短歌

あめつちの となきがとく ひつきの ながきがとく
おとてる かにはのみやに わがおほきみくに若らすらし
みけつくに ひのみつきと あはちの ぬとまのあまの
わたのそこ おきついくりに あはびたに さはよかづきぞ
ふねなめて つかへまつるが たふときみれば
あさなぎに かちのときこゆ みけつくに
ぬとまのあまの ふねにしあるらし

(萬葉集)

おとてる 冠辭 みけつ 國 ひのみつき 日次 わた
のそこ 冠辭 いくり 海底石 御食の物 奉る國 の頁

柿本人麿

人麿は歌聖と稱せらる。最も長歌に巧にして、實に本邦第一の歌人なり。然れども、其事跡は定かからず。持統文武の兩朝に仕へたる人にして、始は草壁の皇子の舍人なりしが、後には任官して石見國に下り、朝集使あそにて都にも出てたりしが如し。其官位の如きも、また分明ならず。

○過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

たまだすき うねびのやまの かははらの ひトリのみよゆ
あれまじ、 かみのことく つがのきの いやつきくへに
あめのした 若ろしめしを そらにみつ やまどをおきて
あをによし ならやまをこけ いかさまに おもふしめせか
あまざかる ひなにのあれぞ いはゞしの あふみのくへの
さゝなみの おほつのみやに あめのした 若ろしめしけむ

すめるぎの かみのみことの おほみやは こゝときけども
おほどのの こゝといへども はるくさの 若けくおひたる
かすみたつ はるびのされる もゝしきの おそみやどころ
みればかなしも

さゝなみの 若がのからさき さきくあれど
おそみやびどの ふねまちかねつ
さゝなみの 若がのおそわだ よそむとも

むかしのひとに またもあはめやも
たまだすき 冠 辭 みよゆ 御代 より つがのきの そらにみつ
あをによし あまざかる いんゞしの さゝなみの もゝ
しきの 孰も 冠辭 される 曇り隔 つる わた 入江の水の淀

○幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

二首竝短歌

やすみしよ わが おそきみの きこしをす あめのしたに
くにはしゆ さそにあれども やまかはの きよきかふちと
みこゝろを よしのゝくにの もぢちらふ あきつれのべに
みやせしら ふとしきませバ もゝしきの おほみやびと
ふねなめて あさかゝわたり ふなぎほひ ゆふかそわたる
このかその たゆることかく このやまの いやたかゝら
いとゞしる たきのみやこゝ みれどあかぬかも
みれどあかぬ よしのゝかはの どこなめの

たゆることかく またかへりみむ
やすみしよ みこゝろを もゝしきの
孰も 冠辭 さそに 澤山 に

ちらふ ち 並へ なめて 鏡ひ ふなぎほひ 漕き どこなめ 常し ちへ

○柿本朝臣人麻呂從石見國別妻上來時歌

二首竝短歌

いはみのみ つぬのうらまを うらなしと ひどこそみらめ
かたなしと ひどこそみらめ よしゑやと うらなけども
よしゑしや かたはなけども いぎなとり うなびをさして
にきたづの ありそのうへに かあをなる たまもおきつも
あさはふる かせこそよせめ ゆふもふる なみこそきよれ
なみのむた かよりかくより たまもなす よりねしいもを
つゆ若由の おきてしくれば このそちの やそくまをどに

よろづたび かへりみすれど いやとほに さとはさりぬ
 まじたかに やまもこえきぬ なつくさの おもひしなむて
 若ぬぶらむ いもがかこみむ なびけこの山
 いはみのや たかつのやまの おのまより
 わがふるそでを いもみつらむか
 さよのはい みやまもさやに さわけども
 われいもたもふ わかれきぬれば
 うらまを 浦の廻り いざなとり にきたづの なつくさの
孰も冠辭 うなび 海邊 かあをなる かハ添辭にて青きといふに同じ さふる 風浪の立
つことを鳥の羽 振にたとへたり おもひしなむて うあたれて物思ふさまをいふ

○高市皇子尊城上殯宮之時柿本人麻呂作

歌一首竝短歌

かけまくも ゆくしきかも いはまくも あやにかしこき
 あすかの まがみのはらに ひさかたの あまつみかさを
 かしこくも さだめたまひて かむさぶと いはがくれます
 やすみしよ わかおほきみの きこしめす そとものくへの
 まきたつ ふはやまこほて こまつるぎ わさみがはらの
 かりみやに あもりいまして あめのした をさめたまひ
 をすぐにを さためたまふと とりがなく あづまのくへの
 みいくさを めしたまひて ちはやぶる ひとをやはせと
 まつろはぬ くに茨をさめと みこながら まけたまへば
 おほみよに たちとりおべし おほみてに ゆみとりもたし

みいくさを	あどもひたまひ	とよのふる	つゞみのおとは
いかづちの	こゑときくまで	ふきなせる	くたのおとも
あたみたる	とらか不ゆると	もろびどの	おびゆるまで
さよけたる	はたのなびき	ふゆでもり	もるさりくれ
ぬでとに	つきてあるひの	かせのむた	なびけるおとく
とりもてる	ゆえずのさわぎ	みゆきふる	ふゆのはやれ
あらしかも	いまきわたると	おもふまで	きよのかれこく
ひきまなつ	やの若けよく	お不ゆきの	みだれてきたれ
まつろいず	たちむかひし	つゆしもの	けなげぬべく
ゆくどりの	あらそふはれ	わたらひの	いつきのみやゆ
かんかせに	いふさまとは	あまぐもを	ひのめもみせず
どこやみに	お不ひたまひて	さだめて	みづ不のくにを

かんながら	ふとしきまして	やすみしよ	わがおほきみの
あめのした	まをしたまへ	よろづよに	あかしもあらむと
ゆふをなの	さかゆるとき	わがおほきと	みこのみかさを
かんみやに	よそひまつりて	つかいしよ	みかどのひと
若ろたへの	あさおろもきて	はよやすの	みかどのはら
あかねさす	ひのくるゝまで	若よじもの	いひふしつ
ぬべたまの	ゆふべになれ	おほどのを	ふりさけみつ
うづらなす	いはひもどほり	さゆらへ	さゆらひかねて
はるとりの	さまよひぬれば	なげき	いまたすぎぬ
おもひも	いまだつきね	ことさへ	くたらのはらゆ
かんはふり	はふりいまして	あさもよ	きのべのみやを
どこみやと	さためまつりて	かむながら	若づまりまぬ

若かれども わがお布きみの よろづよと おもほしめして
つくらしよ かぐやまのみや よろづよに すぎむともへや
あめのおと ふりさけみつよ たまたすき かけて若ぬをむ
かしこかれども

ひさかたの あめ若らしぬる きみゆゑに
つきひも若らに こひわたるかも
はにやすの いけのつよみの こもりぬの
ゆくへを若らに とねりいませふ

(萬葉集)

かけまくも云々 卑き心にかけて 慕ふも勿体なし いはまくも云々 詞にあらはすも畏多し
ひさかたの まきたつ こまつるぎ ちまやぶる 孰も冠辭 か
むさぶ 神威あ るさま あもりいまして 天降りまして まつろはぬ 從はぬ

まけたまへバ 軍の司に任じ給へば あとむひたまひ 引率し給ひ 冬おも
り あかねさす 若トもの はるとりの ことさへぐ 這ひ廻り、いは餘辭 あさも
孰も冠辭 かせのむた 風と共 いはひもとほり
よし 辭冠

失名氏

○文武天皇御即位の詔(宣命)

あきつみかみど、おほやしまぐに若ろしめす、すめらがおほみこと
らまどのりたまふおほみことを、うごなれるみこたち、おほきみ
たち、おみたち、もよのつかさのひとたち、あめの若たのおほみたか
ら、もろくきこしめせとのる。たかまのそらにことはじめて、とは

すめろぎのみよく、なかいまにいたるまで、すめらがみこのあ
 れまさむいやつぎくにおほや若まぐに若らさむつきてと、あま
 つかみのみこあがらも、あめにますかみのよさしまつりしまにま
 に、きこしめしくるこのあまつひつぎたかみくらのわざと、あきつ
 みかみとおほやしまぐに若らしめす、やまとねこすめらみことの、
 さづけたまひおほせたまふ、たふとき、たかき、ひろき、あつき、おほみ
 ことを、うけたまはりかこみまして、このをすくにあめの若たを、
 とよのへたまひ、たひらけたまひ、あめの若たのおほみたからを、め
 ぐみたまひたてたまひむとなも、かむなからおほほしめさくど、の
 りたまふおほみことを、もろくきこしめさへとのる。こよをもて、
 もよのつかさのひとくも、よゆのをすくにおさめまつれとま
 けたまへるくにくのみこともちよにいたるまで、すめらがみ

かどの若きたまひおこなひたまへるくに此のりを、あやまちおか
 すことなく、つかへまつれとのりたまふおほみことを、もろくき
 こしめさへとのる、かれ、かくのさまをきこしめしさとりて、いそし
 みつかへまつらむひと、そのつかへまつれらむさまのまに、
 若なく、ほめたまひをさめたまひむものぞとのりたまふすめら
 かおほみことを、もろくきこしめさへとのる。(續日本紀)

あきつみかみ 現身の御神 おほみことらま らまの助字也 うごなはれ
 る 集れるといふに同じ おほみたから 百姓 なかいま 現今といふ事あり今の世を仰せ付くる あま
 世の中盛の時 あれます 生れおはす よさしまつる 承統御即位の事 やまとねこすめら
 とする心なり はす をすくに まろしめす國 きこしめ
 つひつぎのたかみくらのわざ 世々の天皇の通稱あり但し茲には持統天皇をさす
 みこと し茲には持統天皇をさす
 さへ きこし まけたまへる 設け備へ かれ に

失名氏

○藤原永手公吊ふ詔(宣命)

ふぢはらのひだりのおほおみにのりたまふおほみことをのる。おほみことばませのりたまへく、おほおみ、あすのまゐてきつかへむとまたひたまふあひたに、やすまりてまゐでますことはなくして、すめらがみかどをおきてまかりまゐぬときこゝめして、おほほさく、およづれかも、たそことをかも、いふまことにあらば、つかへまつりとおほきまつりごとのつかさのまつりごをば、たれによさしかもまかりいます、たれにさづけかもまかりいます。くやしきかも、かなしきかも、わがおほおみ、たれにかもわがかたらひさけむ、たれにかもわがとひさけむと、くやしき、あたらしき、いたみ、かかえしき、おほみねなかしき、すとのりたまふおほみことをのる。くやしきかも、あ

たらしきかも、けふよりの、おほおみのまをいふまつりごとい、きこしめさすやならむ、あすよりの、おほおみのつかへまつりごとい、すがたは、みそなはさすやならむ。ひつきかさかりゆくまに、かなしきことのみ、いよゝおこるべきかも、とつきつよりゆくまに、わびしきことのみ、いよゝまさるべきかも、わがおほおと、はるあきのうるまゝいをば、たれとよにかも、みそなはしめてあそびたまはむ、やまかひのきよきところをば、たれとよにかも、みそなはしあからへたまはむとなけきたまひ、うれひたまひ、おほまゝとすとのりたまふおほみことを、のる。みまし、おほおみの、よろづのまつりごとふさねもちて、たゆみおこたることなく、まげかたふくることなく、おほきみたち、おとたちをも、かれこれわくこゝろあく、おほきみたち、あまねくたひらけくまをさひ、おほえたからのうへを

も、ひろくあつくめぐみて、まをさひしこと、これのまにあらず、すめ
らがみかさを、若ましのまも、まかりいでよやすまふことなく、をす
くはのまつりごと、よくあるべきさま、あめの若たのおほみたか
ら、平すまるべきことを、あさよひよるひるといはず、おもひまか
りまをさひつかへまつれば、いそしみ、あきらけみ、おたひらみ、たの
ましおもほしつゝ、おほましますあひたに、たちまちに、わがみの
まをさかりて、まかりまぬれば、いはむすべもなく、せむすべも若
らに、くやしひたまひ、わびたまひ、おほましますとのりたまふおほ
みことを、のることわけてのたまひく、つゝへまつりしこと、ひろみ
あつみ、ましましおほおみのいへのうちのこまをも、はふりたまひ
ず、うしなひたまはず、めぐみたまはむ、おこしたまはむ、たづねたま
ひむ、かへりみたまをむ、みまし、おほおみのまかりぢも、うしろむろ

く、こゝろもおたひにおもひて、たひらけく、ささく、まかりとほらす
べしとのりたまふおほみことを、のる。(日本書紀)

またひたまふ 待ち 給ふ およづれ 言 かたらひさけむ 談合 せむ
おほみね 御發 聲 あからむ 眼をう っす みまし 汝 まをさひ
し申 流離 はふる 幸 ささく に まのりとほらす 遠逝せ ます

失名氏

○祈年祭祝詞

みとしのすめがみたちのまへにまをさく、すめがみたちのよさと
まつらむおきつみとしを、たなひちに、みなわかきたり、むかも、に、
ひちかきよせて、とりつくらむおきつみとしを、やつかほのいかし

ほに、すめがみたちのよきとまつらば、まつほをば、ちかひやほかひ
 にたてまつりおきて、みかのへたかとり、まかのはらみてならべて、
 若るにも、かひにも、たゝへごとをへまつらむ。おほぬのそらにおふ
 るもの、あまを、からな、あをみそらにすむもの、はたのひろもの、
 はたのさもの、おきつもの、へつもの、いたるまで、みそ、あかる
 たへ、てるたへ、にぎたへ、あらたへに、たゝへごとをへまつらむ。みと
 しのすめがみのまへに、若ろきうま、若ろきる、若ろきかけ、くさく
 のもの、まを、そなへまつりて、すめみまのまこと、のうつのみて、
 らを、たゝへおとをへまつらくとのる。いせにます、あまてらすおほ
 みかまのおほまへに、まをさく、すめおほみかみの、みそるかゝます
 よもの、くは、あめのかきたつき、み、くは、のそきたつかぎり、あを
 ぐもの、たなびくきはみ、若らくもの、おりむかふすかぎり、あをみ

はら、い、さをかぢほさず、ふねのへのいたりどまるときはみ、おほわ
 たのそらにふねみちつゞけて、くがよりゆくみち、は、のをゆひか
 ためて、いはねさねふみさくみて、うまのつめのいたりどまると
 ぎり、ながちひまなくたちつゞけて、さきくは、ひろく、さかゝさく
 には、たひらけく、とほきくは、やそつなうちかけて、ひきよするこ
 とのごとく、すめおほみかまのよきとまつらば、のさき、すめおほ
 みかまのおほまへに、よこやまのまこと、うちつゝおきて、のこりを
 ば、たひらけくきこめさむ。また、すめみまのまことのみよを、たな
 がのみよと、かき、は、ときは、いそひまつり、いかゝのみよに、さき
 はへまつるがゆゑに、すめらむつかむろぎ、かむろみのみことゝ
 うじもの、うなねつきぬきて、すめみまのみこと、うつのみてぐら
 を、たゝへごとをへまつらくとのる。(祝詞式)

おきつみとし 稻 九かひちに云々 臂に水泡、股に泥をこつ
 けて勞作する様なり
 やつかほのいかしは 稻穂の大きい ちかひやほかひ 加ひどの
 稲穂あり
 れはぬのはら 野田 あをみそら 海 そたのひろものそた
 のさもの 大魚 小魚 おきつもとへつものは もは、海藻にて岸に遠き
 は岸近に生ずるを へつものはといふ 海 服 かけ 鶏 うつのみてぐら 堆き
 おほわたのそら 面 海 さくむ ふみく ながち 路 のさき
 神に供す 初穂 かきはいつきはに 堅く變 いらす いかしのみよ 莊盛な
 すめらがむつかむろぎかむろみ 天子の 神祖 うトものうなねつ
 きぬき 鶉の如く首 をつき垂れ

中等教科 國文學卷四 終

版權所有

明治廿四年六月一日印刷
 全 年六月五日出版
 全 年十一月一日印刷
 全 年十一月九日訂正再版

(中等教科國文學卷三)
 定價金四拾五錢

編纂者 高津 鈇三郎
 東京本郷區駒込西片町十番地

全 和田 萬吉
 東京本郷區千駄木町四十七番地

印發行 兼 小 林 義 則
 東京日本橋區本町四丁目十六番地

發 兌 文 學 社
 東京日本橋區本町四丁目十六番地

代關西賣捌店

大坂東區備後町四丁目

吉岡平助

府下所大

東京日本橋區通油町

水野慶次郎

全

東京京橋區南傳馬町二丁目

目黒十郎支店

賣捌所

各府縣書店

印刷

東京京橋區瀧山町七番地

瀧關社

中學校師範學校教科用書出版廣告

中村五六先生編纂

日本誌

卷一 定價金五拾五錢

萬國誌

卷二 定價金六拾五錢

郵稅各

本書ハ尋常中學校同師範學校等ノ中等教科書ニ充テシカ爲メ出版シタルモノニシテ其編纂ノ順序方法宜シキヲ得隨而文字文章ニ一ノ點ノ難スヘキナキハ勿論製圖ノ精確緻密ナルト其印刷ノ鮮明美麗ナルト繪畫ノ趣向紙質ノ光澤製本ノ注意等總テ外國製ノ榮ヲ垂ラシテラレシマラセリ

文學士高津鐵三郎先生同纂 中等 國文學 全四冊

卷一 卷二 定價各金四拾錢 郵稅各

國文國語ノ書類世間抄カラスト雖モ中學教科書トシテ採擇スヘキ完全ナル書類ニ至リテハ甚ダ稀ナリトス本書ハ此欠ヲ補ヒ尋常中學同師範學校ノ教科書ニ充ル目的ヲ以テ高津和田兩文學士ノ編纂セラレタル最良ノ教科書タリサレハ兩書トモ發刊以來頗ル好評ヲ博シ已ニ十數ヶ縣他各種學校等ノ教科書ニ御採用

代關西賣店

大坂東區備後町四丁目

吉岡平助

府下所大

東京日本橋區通油町

水野慶次郎

全

東京京橋區南傳馬町二丁目

目黒十郎支店

賣捌所

各府縣書店

印刷

東京京橋區瀧山町七番地

瀧關社

中學校師範學校教科用書出版廣告

中村五六先生編纂 中等地理全四册

日本誌(卷一) 定價金五拾五錢 萬國誌(卷二) 定價金六拾錢 郵稅各

本書ハ尋常中學校同師範學校等ノ中等教科書ニ充テシメテ出版シタルモノニシテ其編纂ノ順序方法宜シキヲ得隨而文字文章ニ一點ノ難スヘキナキハ勿論製圖ノ精確緻密ナルト其印刷ノ鮮明美麗ナルト繪畫ノ趣向紙質ノ光澤製本ノ注意等總テ外國製地理ニ讓ラザルハ弊社ノ自ラ誇ル所又世評ノ許ス所ナリ幸ニ清覽ヲ賜ヒ續々御採用ノ榮ヲ垂ラレシムルコトヲ乞フ

文學士高津鐵三郎先生同纂 中等國文學全四册

卷一卷二 定價各金四拾錢 郵稅各

國文國語ノ書類世間尠カラスト雖モ中學教科書トシテ採擇スヘキ完全ナル書類ニ至リテハ甚タ稀ナリトス本書ハ此欠ヲ補ヒ尋常中學同師範學校ノ教科書ニ充ル目的ヲ以テ高津和田兩文學士ノ編纂セラレタル最良ノ教科書タリサレハ兩書トモ發刊以來頗ル好評ヲ博シ已ニ十數ヶ縣ノ尋常中學校同師範學校其採用ノ榮ヲ荷フニ至レリ

學藝新書定價改正謹告

弊社、教育家諸君ノ教示ニ頼リ、聊カ文教ノ萬一ヲ裨補セシメテ期シ、教育ニ關スル圖書ノ出版ニ從事スルコト、年茲ニ久シ、幸ニ諸君ノ左提右挈セルヲ、アリテ、社運日ニ隆盛ニ趣キ欣喜ニ堪ヘズ、特ニ昨年來出版ノ學藝新書十數種ハ、編纂其當ヲ得タルニ由ル歟、諸君ノ需要急ナリシニ由ル歟、將タ此種ノ著書世間其類罕ナルニ由ルカ、大ニ好評ヲ博シ從ニ榮ヲ得ルニ至リタレハ、此際更ニ出セハ從テ盡キ、今ヤ各學科皆再ニ三版ニ定價ヲ改正シ、以テ多年ノ愛顧ニ酬ヒントス、願クハ江湖ノ教育家諸君倍舊ノ恩命ヲ賜ハリ、益々教育ノ普及上進ヲ希圖セラル、ト共ニ弊社ヲモ之ニ伴隨セシメラレシコトヲ

文學社敬白

文學士澤柳政太郎編纂 **心理學全一册** 金一拾五錢 郵稅四錢

心理學ヲ修メント欲スル者ノ最モ、遺憾トスル所ハ、簡明ノ書ナキニアリ、今其嘆ヲ救フモノハ此心理書ニ若クモノ無シ、其所說簡明ニシテ字句甚タ流暢ナリ、加之緊切ノ文字ニハ、原語ノ對照スルモノアリテ初學者タリトモ敢テ感テ所ナカラシムルノ良書ナリ、

文學士三宅雄二郎編纂 **論理學全壹册** 金一拾五錢 郵稅四錢

雄快ノ筆ヲ染メテ、先ツ總論ヨリ直覺及概念ニ、斷定ニ、推理ニ、理外ノ理ニ、論理發達ノ順序ニ等八章五拾貳節中理ヲ加クルニ例、例ヲ補フニ圖式ヲ以テセラレタレ

ハ辨論ノ術ヲ知り法ヲ悟ルニ於テ、無比ノ良書タルヤ必セリ、
文學士澤柳政太郎全纂 **倫理學全壹册** 金一拾五錢 郵稅四錢

天地自然ノ大道ニ據リ之ヲ人間心意ノ働キニ徴シテ人タル者ノ據ルベキ守ルベキ原理ヲ兩君得意ノ簡潔文字ヲ以テ最モ平易流暢ニ叙述セラレタレバ繁劇頻多ナル明治ノ新天地ニ在リテ倫理道德ノ骨子ヲ知ラント欲スルモノニハ倫理書中ノ巨擘ト謂フベシ、

物理學全壹册

理學士磯野德三郎編纂 **化學論全壹册** 金一拾五錢 郵稅四錢

本書ハ化學ニ關スル原理ヲ最モ明瞭ニ最モ丁寧ニ說述シタルモノニシテ、此書ノ真理ヲ究メテ化學ヲ教授セハ、是ニ於テ始メテ此學問ノ眞價ヲ知ラン、

理學士岩川友太郎編纂 **動物學全壹册** 金一拾五錢 郵稅四錢

簡ニシテ畧ナラス精ニシテ冗ナラサルハ本書ノ特色ニシテ動物諸種ノ形狀、部分、習性、効用等ヲ詳細ニ論述セラレタレハ所謂寸鐵人ヲ殺スノ價値アル良書ナリ、

獨逸理學士 **植物學全壹册** 金一拾五錢 郵稅四錢

長松篤葉編纂 **植物學全壹册** 金一拾五錢 郵稅四錢
植物ノ形骸、構造、組織、生理、榮養、生活、蕃殖、分類、移動、呼孔等ニ關シ毫モ漏ス所ナク說了セリ、故ニ植物諸種ノ新說ヲ知ラント欲セハ此書ヲ繙クベシ、

理學士西松二郎編纂 **鑛物學全壹册** 金二拾五錢 郵稅四錢

趣味ノ乏シキ學科ニ西氏カ平生ノ實驗ヲ積マレ十分ニ趣味ト學理ト實際ト併セ述ヘラレタレハ此道ノ初學者ニ最モ適當ノ教科書タル更ニ疑ナキヲ必ス、

〔峯是三郎同纂〕 **學校管理法全壹册** 金二拾五錢 郵稅四錢

本書ノ特色タル所ハ、其所論、今日ノ事情ニ對シ着實ニシテ應用上ニ適切ナルニ在リ故ニ教育實業家ノ好伴侶タリ、講習用ノ良教師タリ、

〔黑田定治同纂〕 **教授術全壹册** 金二拾五錢 郵稅四錢

本書ハ黑田木下ノ兩氏カ教授ノ理法ヲ其平生ノ經驗ニ憑ヘテ最モ叮嚀深切ニ編纂セラレタレハ一言一語皆能ク現時ノ小學校ニ適切セリ之カ局ニ當ルノ人ハ必ス之ヲ精キテ以テ教授ノ嚮導トセヨ、

久保田貞則編纂 **教育學全二册** 各金二拾五錢 郵稅四錢

久保田氏カ從來ノ學識ニ多年ノ實驗ヲ加ヘテ知育ヲ心理論理ノ兩面、德育ヲ人倫綱常ノ大道、体育ヲ生理學ヨリ論究シテ專ラ實用ヲ主トセラレタレハ字々句句々我邦今日ノ事情ニ適シタル教育學ナリ、

〔鳥居枕一校〕 **音樂楷梯全一册** 金二拾錢 郵稅二錢

唱歌ノ理法ニ明カナラント欲セハ、必ス先ツ此書ニ就テ修ムル所アルヘシ、所說簡單ニシテ一切漏ラスコトナキ便利ノ書ナリ、

〔上眞行〕 **普通音樂談全一册** 金二拾錢 郵稅二錢

白井規矩郎著述 問答法ニヨリテ音樂上ニ關スル必要ノ趣旨ヲ説明シタルモノニシテ、一タヒ此書ヲ讀マハ、恰モ暗夜ニ光明ヲ得ルノ思アラシム、

●其他ノ學科漸次出版

文學士高田早苗著

NIPPON NEW READER. 全二册 〔一〕金十八錢 郵稅六錢 〔二〕近刻金廿五錢 同六錢

此書ハ文學士高田早苗氏カ我邦士女ノ英語ヲ學フニ最モ入り易ク解シ易キヲ旨トシテ常ニ人口ニ膾炙スル我邦ノ事實ヲ老練ノ筆モテ縱橫自在ニ物セラレタレハ文字ノ排置ト云ヒ圖畫ノ精緻ト云ヒ製本ノ堅美ト云ヒ世ニ稀ナル新板ナリ已ニ東京專門學校及成立學舍男女子部ノ教科書ニ採用ノ榮ヲ得タレハ世ノ英學ニ志アル士女ハ必ス購讀ヲ要スベキナリ

〔高等商業學校教員〕 **商業作文書全二册** 上金四拾錢 郵稅六錢 下金四拾五錢 同六錢 岡野熊太郎編纂

商法ノ將ニ實施セラレントスルニ際シテ最モ必要ヲ感シタルハ即チ本書ナリ本書ハ東京高等商業學校岡野熊太郎氏カ商法ヲ經トシ自己ノ學識及多年ノ經驗ヲ緯ト爲シテ凡ソ其社會ニ往復スベキ通信文ヲ首メ契約文訴訟文公用文及精算書類ニ分類シ執レモ皆綿密周到ナル注意ヲ以テ編纂セラレタルハ各地ノ商業學校教科書ニ適スルハ勿論廣ク世ノ商業實務家諸君ノ座右ヲ離ルベカラザル一大新書ナリ

峯是二郎編纂 **新定作文書 教師用全一册** 金五拾錢 郵税八錢

峯是二郎編纂 **新定作文書 生徒用全四册** 各金八錢 郵税不要

本書ハ小學校ニ於テ作文教授方ノ困難ヲ醫センカ爲メ峯是二郎君カ豊富ノ學識ニ幾多ノ經驗ヲ加ヘテ單語短句ノ綴リ方ヨリ接續詞ノ使用法簡單ナル庶物ノ記事口上書類往復文公用文證券文電信文等ニ至ルマテ一切洩ラスコトナク其教授ノ方法ト其文格トヲ一々綿密周匝ニ説キ示サレタルモノナレハ尋常小學校ヨリ高等小學校ニ通シテ作文教授ノ規矩準繩タリ故ニ同書生徒用ノ分ト併セテ之ヲ用ヒナハ勞スル所少クシテ收ムル所ノ効果必ス倍蓰スルヲ見ン

本書は方今、全國教育社會ニ、喧シク持囀サレ、王ナリト呼

特歩無雙ナリト評セラレ、作文書中ノ王ハレタリ



終

